目次
「大学史研究」の必要性 1
2002年度「指定研究」研究経過報告 2
2002年度「一般研究」研究結果概要 15
海外学会等参加報告 17
客員研究員報告 23
彙報 25

大谷大学真宗総合研究所
研究所報
No.43 2003. 10. 1.

「大学史研究」の必要性

真宗学事研究チーフ 教授 神戸和麿

本学は、2001年の近代化百周年を期に、大学の歴史を振り返るべく幾つかの重要な出版をした。『大谷大学 近代100年のあゆみ』(1997年8月)、『大谷大学百年史』(2001年10月)、『清沢満之全集』全9巻(2003年7月)などがそれである。これらの成果は、研究所が開所した1981年に「近代における真宗の展開」と題された指定研究に端を発している。その指定研究はその後「真宗学事研究」「大学史編纂研究」「大谷大学近代史研究」「清沢満之研究」と展開し、それぞれの研究成果が先の出版物となって公開されたのである。今、こうした二十数年のあゆみを改めて振り返ってみると、順次展開する課題において、一応なりとも表現し得た点と、そこから新たに見えてくる課題があることに気づかされる。

思えば、当初の指定研究から「真宗学事研究」が生まれたきっかけは、「近代における真宗の展開」という課題があまりに大きすぎて茫洋としていたことが明らかになり、課題を限定したからであった。それゆえ当初の構想では、近代性を明らかにするためにはそれ以前の検証が不可欠であるとの視点から「300年史」が常に意識されていた。その後、差別ビラ事件(1986年)の混乱の中から、真宗大学東京開校百周年が強く意識されるようになり、研究は次第に近代中心へと傾斜してきたのである。こうした観点からこれらの出版物を見たとき、今回の『百年史』では充分に表現できなかったことが随分あるように思われるのである。たとえば歴代学長の業績などについて言えば、清沢・南条・佐々木以外の諸氏についてはほとんど関説することができなかったのである。こうした点は今後資料の収集と分析研究を重ねていく必要がある。そして当初の課題であった「300年史」へと視野を広げていかなければならないのである。

「大学」という公的な機関は、本来時代社会と密接に結びついている。つまり、大学の変遷は時代社会の移り変わりを写す鏡なのである。その意味では大学の歴史を研究することは、時代社会を明らかにするための研究の一分野となり得るはずである。その上さらに本学は大谷派宗門とも深い関係にある。その意味では、本学の歴史を明らかにすることは、単に本学内部の者にとっての意味ばかりではなく、近世・近代の日本における宗教教育・高等教育や学術研究、さらには宗教教団の実態を明らかにするための重要な手がかりの一つと言うべきなのである。昨今、こうした視点からの大学史研究への関心が高まり、大学によっては、すべての公文書を保存収集するための機関として「大学文書館(大学アーカイブズ)」を持っているところもある。

「真宗学事史研究」や「清沢満之研究」が直ちにそうした機能を持つものとなるべきだということではないが、大学の歴史に関する資料の収集は継続的・体系的に続けていかなければならないのである。これまでの指定研究の発想はどちらかといえば、大学内や教団内を意識し、そのあゆみを検証して大学の未来を構想するというものであったように思う。そのこと自体は正しいのであるが、今やそれでは不十分なのである。大学には時代社会の研究に資する歴史資料としての大学史資料を整理し提供する責任があるという発想が必要なのである。

2002(平成14)年度「指定研究」研究経過報告

真宗学事研究

清沢満之研究
—『清沢満之全集』の編纂と思想研究—

キャップ・教授　神戸　和麿
(真宗学)

本研究は、2001年の大谷大学近代化100周年を機縁として、本学建学の原点を確認していくために、学祖・清沢満之の「全集」の編纂および刊行を目的として、昨年度に引き続き研究を進めた。

昨年度の報告と若干重なるが、全集の概要について記しておきたい。

今回の全集は清沢の著述をテーマ別に分け、全9巻をもって構成した。すなわち、第1巻宗教哲学、第2巻他力門哲学、第3巻哲学論集、第4巻哲学史研究、第5巻西洋哲学史講義、第6巻精神主義、第7巻仏教の革新、第8巻信念の歩み—日記—、第9巻信念の交流—書簡—、である。これによって清沢の思想的課題がより明確となることを目指した。

また編集にあたっては、清沢の自筆原稿があるものについては自筆原稿を依拠本とし、出版されたものについては初出掲載を依拠本として校訂作業を進めた。校訂の基本方針としては、依拠本に忠実であることを原則とし、編集者の見解は注に示した。また、各巻には文献ごとの解題と編集担当責任者による解説を付した。編集体制は次の通りである。

編集委員代表　小川一乗
編集委員　寺川俊昭、久木幸男、今村仁司、小野蓮明、神戸和麿、安冨信哉、延塚知道、池上哲司、須藤訓任、友田孝興、沙加戸弘
編集実務担当　神戸和麿（チーフ）、泉　恵機、一楽真、一色順心、大城邦義、織田顕祐、加来雄之、門脇　健、木越　康、木場明志、草野顕之、中川皓三郎、東舘紹見、兵藤一夫、藤嶽明信、三木彰円、宮崎健司、宮下晴輝、村山保史、山本和彦、ロバート・F・ローズ、渡辺啓真
編集補助　西本祐攝、冨岡量秀、日野圭悟、義盛幸規

刊行のための作業は、各巻の編集担当者が作成した本文・解題などの元原稿を整理し、註を付す箇所を決定し、註原稿を作成していくというものであった。具体的には6月末に第1巻と第2巻の原稿を入稿し、それぞれ3度の校正を各巻担当者および岩波書店編集部と協力しながら行った。その間にも、次の巻の原稿作成を同時に進めるという、かなり厳しい日程であった。また口絵の選定や月報の作成など、本文以外の作業も併せて進めた。更には編集作業中にも新たな資料が見つかり、その調査収集にも当たった。

このようにして、11月28日第1回配本として第1巻を刊行することができた。それ以後、毎月1巻のペースで順次刊行を続けた。各巻の刊行日および頁数は以下の通りである。

第一巻	宗教哲学	11.28	437頁
第二巻	他力門哲学	12.25	431頁
第三巻	哲学論集	1.28	378頁
第四巻	哲学史研究	2.27	384頁
第五巻	西洋哲学史講義	3.25	451頁
第六巻	精神主義	4月末刊行予定	
第七巻	仏教の革新	5月末刊行予定	
第八巻	信念の歩み—日記—	6月末刊行予定	
第九巻	信念の交流—書簡—	7月末刊行予定	

このように、本年は全集の編纂にかかりきった一年であった。編集担当の方々のご尽力によって、何とか毎月1巻の予定を守って刊行を続けることができている。後半の4巻についても刊行できるように作業を継続している途上にある。

尚、全集の編集作業の上で改めて見つかった課題もあり、自筆資料などの調査および収集については、これまでに引き続いて行っていく必要がある。

真宗学事研究

真宗学事史研究
—真宗学事関係史料の整理と公開—

キャップ・教授　安冨　信哉
(真宗学)

本研究は、昨年度『大谷大学百年史』(以下、『百年史』と記す)を刊行し終了した「大谷大学近代史研究」から多くの貴重な資料を受け継ぐとともに、真宗の学事三百余年の歩みの確認という本研究所開所時以来の課題を研究目的として改めて掲げ、発足したものである。初年度に当たる本年度においては、これらの諸資料と課題とをいかなる形で継承してゆくかを検討しつつ、可能な部分からこれを実行し、成果の一部を公開してゆくこととした。

まず着手したのは、集積されてきた学事関係資料の整理である。現在、本研究の所蔵にかかる資料は、大別して、1983～90年度に置かれていた「真宗学事研究」期に蓄積されたものと、1991～2001年度の「大学史編纂研究」・「大谷大学近代史研究」期に収集されたものとがある。前者については保存期間が既に長期にわたっており、分量的に大部であるばかりでなく内容的にも慎重な扱いを必要とするものが少なくない。よってこれらの整理はその全体像を把握しつつ漸次とり行なうこととし、当面は後者、すなわち1991年度以後に主として『百年史』編纂に資する目的で収集された資料の整理から始めることとした。本年度においてはその第一歩として、『百年史』叙述の資料として用いられた種々の複写資料を、個別タイトルを付しつつ分類整理しデータベース化するとともに、タイトルを記したファイルに綴じ込み配架する作業を行なった。これについては、2002年度末までにほぼ終了することを得た。次年度も、1991年以後に収集された資料の整理を中心に作業を継続してゆきたい。中でも特に、写真集『大谷大学近代100年のあゆみ』や『百年史』に用いる目的で収集された多くの貴重な写真資料の整理・保存は、内外からの閲覧の希望も増加している現在、早急に行なう必要がある。また1990年度以前からの収集にかかる資料の整理にも着手したい。こうした資料の整理・保存は地道な作業の積み重ねであるが、学事に関するあらゆる研究とその成果の公開の基礎となるものであるので、今後いかなる研究体制がとられようとも確実に継続されるよう、しかるべきあり方を検討しつつ行なってゆきたいと考えている。

一方、こうした整理作業と併行して行なったのが、『大谷大学百年史 資料編 別冊—「学徒出陣」「勤労動員」体験集—』の公刊に関する業務である。『百年史』の編纂に際しては、第二次世界大戦期の資料の不足を補う目的で、2000年6月、当時の「大谷大学近代史研究」によって、当該時期に在学していた900名あまりの方々にアンケートの依頼がなされ、このうち200名ほどの方々から多くの貴重な回答が寄せられた。これにより『百年史』の当該期の叙述は豊富かつ臨場感あふれる内容を持つものとなったが、その刊行直後より、同書に記された戦時中の状況の詳細を知りたいという声が学内外から寄せられるようになった。このため大谷大学においても、アンケートの内容を広く公開してゆくことが果たすべき責務であると判断されるにいたり、本研究においてその刊行に向けての業務が進められることとなったのである。

本年度においては、まず前期(夏期休暇まで)の期間中に、前研究班より引き継いだアンケートの原文を、内容の確認を行ないつつデータ化するとともに、これを回答者に送付して掲載の許諾と内容の確認を依頼する作業を行なった。そして、引き続き後期においては、掲載の許諾を得た201通について、返送された内容にもとづきデータの修正を行ない、その上で、時代背景や事実関係に十分な注意をはらいつつ、全体を通読する作業を繰り返し行なった。全般的な表記の原則の確立をはじめ、事実関係の確認や、人名・地名・部隊名等の固有名詞に関する表記法の統一などに予想外の時間を要したため、今年度末の段階で成稿には至っていないが、当該期に関する学事資料として、将来にわたって十分な価値を有するものとなるよう、引き続き慎重に作業を進めてゆく。これをできるだけ早い時期に成稿化し、凡例・解題・分析・関係年表等を付して、明年度の刊行を期したい。

以上が本年度における研究の主たる経過であるが、この他に、他大学における大学史の編纂および資料の整理・公開に携わる方々と交流し、意見を交換できたことも、本研究の進むべき方向性と方法を考える点で非常に有益であった。今年度は、大学史資料協議会西日本部会の研究会並びに交流会に参加したが、そこで得られた情報にもとづき、明年度においては、具体的に他大学における大学史研究のあり方を視察し、本学として真宗学事史関係資料を整理・研究・公開してゆくにはいかなるあり方がふさわしいかについて、調査・研究に着手したいと考えている。

近代100年における本学の歩みをふり返る『百年史』

の編纂・刊行が、21世紀の幕開けに際会して果たされた今、学寮創設期より三百余年を通じた学事の内容を検討しその成果を公開することは、本学における学の指針の確立に直結する営為として、改めて重要な課題となりつつある。また、その基礎となる資料の収集・整理・保存の重要性についての認識も、今後一層深まってゆくであろう。明年度においても、かかる研究の継続的な推進を保証する場となるよう、つとめてゆく所存である。

真宗学事研究

真宗教学研究
—『七祖聖教』の校訂・註釈—

キャップ・教授　沙加戸　弘
（国文学）

「（プロジェクト名）真宗学事研究・（推進研究）真宗教学研究」は、1999・2000年度委託研究「浄土真宗文献研究班」の課題と作業を継続するかたちで、2001年度に発足した。

当研究班の本年度の課題としては、1999年度以来一貫して進めてきた真宗高田派専修寺蔵「宗祖加点本」『観経四帖疏』の翻刻作業の継続という大きな見通しが立てられていた。

しかし、これまでの取り組みを通して、聖教テキストの編纂作業にかかわって様々な問題点が露呈しており、翻刻作業の方向性をどのように定め得るかということが研究班の焦眉の問題となっていた。

そのことを踏まえて、2002年度の研究は、大谷大学において聖教編纂が企図された1996年度以来の作業経過、およびそこでの課題と問題点の確認と整理ということから具体的に着手することとなった。

それらの確認を通して、2002年度に当研究班が取り組むべき方針として、以下の4点が全体で確認された。

①「七祖」とは何か、「聖教」とは何か、大谷大学が編纂刊行すべきテキストとはいかにあるべきか、という問題を恒常的に議論すること。

②テキスト翻刻において求められる基礎知識、関連知識の収集、整理。

③翻刻資料の再読み合わせ、確定の作業を通じて、研究員一人ひとりがテキスト翻刻における基礎技術を習得し、今後の編纂作業の主軸となる。

④上記の目的を達成するために、毎週研究会を開催する。

これらの方針に基づいて、「宗祖加点本」『玄義分』の翻刻を具体的な作業として進めてきたわけであるが、毎週1回開催した研究会は、これまでに作成された翻刻原稿、校訂および註の確認を内容とするものであった。

従来は、当研究は主に、真宗学・仏教学のスタッフによって構成されていたが、本年度はそれに加えて国文学等の他分野から研究者をスタッフとして迎えることができ、従来の研究成果について、新たな視点から翻刻・訓読上の問題点を洗い出し検討を加えていくというかたちで研究を進めていくことができた。

そのような状況のなかで本年度改めて明確になったのは、これまでの翻刻作業のなかでなされた判断について、さらなる検討と確認を必要とする箇所が少なくないということである。その意味で、今後さらに諸分野からの参加・協力のもとに、聖教編纂体制の充実をはかっていく必要があることは明らかである。

しかし、それらの体制を整えていくことも、ただいたずらに人数を確保するということを意味するものではない。結局、聖教編纂への取り組みにおいて直面する諸問題が帰するところは、テキストの編纂と刊行とを、大谷大学がいかなる目的と方針においてなそうとするのかということをどれだけ明確にできるかという一点なのである。大谷大学においてはたされるべき聖教編纂が、いかなる目的と方針のもとに視点を一貫させ得るかということの決定が、研究作業の進展と体制の充実をはかるうえで、何よりも必要とされるのである。

定例研究会の席上、このような問題について、常に議論が交わされてきたのであるが、定例研究会は翻刻原稿の確認作業を目的とするものであり、議論不足の感は否めなかった。そのことを踏まえて、「聖教編纂」とその公開にかかる問題点について集中的に議論するために、2003年2月20日・21日の両日にわたって、「「七祖」とは何か、「聖教」とは何か、大谷大学が編纂刊行すべきテキストとはいかにあるべきか」というテーマで、湖西キャンパス・セミナーハウスを会場として研究会を開催した。

この研究会は、聖教編纂および刊行における問題点を確認し、そのうえで具体的な方向性を提示することを目的として設けられたものである。そこで聖教編纂全体の構想に関して、おおよそ次のテーマで議論がなされた。

(1)真宗における「七祖」の位置づけ

(2)「聖教」という概念の位置づけ

(3)編纂作業を可能ならしめる体制と状況について

(4)大谷大学における「学」の公開

さらには、上記の点を踏まえて、聖教編纂・公開に具体的に取り組むために以下の問題について具体的に検討を加え、当研究班としての方針を確認した。

(1)基本方針
(2)収録すべき聖教
(3)底本対校本の決定に必要とされる作業
(4)聖教テキストの刊行の方針
(5)編纂作業体制についての方針
(6)聖教編纂のスケジュール

これらの議論を通して、『教行信証』「坂東本」の公開に向けて翻刻等の編纂作業に早急に取り組むべきことが確認され、その作業に向けての日程および体制についての方針案を決定し、検討を加えた。なおこれについては、すでに2003年3月に報告書（A4・37頁）にまとめ、真宗総合研究所に提出した。

なお、上記の取り組みに加えて、聖教古典籍に対する基礎知識、および翻刻にかかる作業技術の習得をはかるために、「真宗関連聖教及び七祖聖教古写本の調査収集」を目的とする資料採訪調査を岐阜市上宮寺において9月4日・5日の2日間にわたって行った。

国際仏教研究

国際真宗学研究
—近代教学思想研究—

キャップ・助教授　Robert F. Rhodes
（仏教学）

本研究班は、仏教研究を中心とした国際的学術交流の推進をはかることを目的とするものである。近年、国際社会において仏教、特に真宗への関心が高まっている。そのような中、海外仏教研究の最新の情報を継続的に〈受信〉しつつ、本学における真宗を中心とした仏教研究の成果を〈発信〉していくことは、国際レベルでの仏教研究にとってきわめて重要な意味を持つものと思われる。

(1)〈受信〉についてはこれまで、国内外の宗教系・仏教系学会への研究員の派遣や海外仏教関係書籍の収集作業を行ってきた。これについては通常の研究業務として、本年度も継続して行っているが、次のいくつかの点で、現在問題も生じている。

・海外への研究員の派遣については現在情勢が不安定であるため、積極的に行っていくことがためらわれる状況にある。
・仏教関係資料等の収集に関して、研究所の移転に伴う図書整理作業が滞っており、さらに雑誌を中心とした図書の受け入れ態勢の調整等のために全体的に遅れ気味である。
・ヨーロッパ語圏やキリスト教を中心とした他宗教に関する資料等、収集資料に関して視野を拡大する必要性も、近年の研究の成果から願われている。人員の確保等も含めて、このような状況に対応できるような受け入れ態勢を確立する必要があるように思われる。

研究所移転にともない、図書館や総合研究室と有機的な関係を持つことが可能となり、収集の方法についてはもちろんのこと、収集した資料のこれらへの機関にむけての公開の問題など、今後さらに検討を要する点が多くなっている。研究の〈受信〉業務については、見直しをしなければならない時期に来ているものと思われる。

(2)〈発信〉に関しては、昨年まで真宗の代表的近代教学者の著作・論文数点を英訳し、その成果を海外出版社より発行する作業に取り組んできた。すでに2001年度までに、清沢満之「普通道徳と宗教的道徳の交渉」「我が信念」「仏教者盍自重乎」、曽我量深「地上の救主」「親鸞の仏教史観」「歎異抄聴記」、金子大栄「真宗学序説」、安田理深「名は単に名にあらず」の英訳（全訳および部分訳）を完了し、現在はこの成果を「近代真宗教学アンソロジー（仮）」として出版するため、原稿間での訳語の調整や解説文の作成作業を進めている。

ただ、親鸞の思想研究において「近代真宗教学」が持つ学問的・歴史的意味が理解できないという出版社よりの指摘を受けた。現在解説文にこの点についての説明を加えるため、「近代真宗教学」に関する研究会を重ね、解説文を作成中である。日本の仏教学会においてもそれ程定着しているとは考えられない「近代真宗教学」という用語や概念が、日本国内はもとより世界の仏教研究界の中でどのような意味を持つものであるかを確かめることは、意外に困難な作業であり、これについては出版成立後もさらに検討していく必要があると思われる。

その他、各論文の版権の問題など、海外出版社との間で細々した調整をする必要がある点がいくつか生じているが、これらを一つずつクリアーしながら出版に向けた作業を進めていきたい。

また、「近代真宗教学アンソロジー」出版事業を受けて、翻訳者や国内外の関係研究者を招いた国際シンポジウムを2003年に開催する計画を立て、これまでその開催に向けて準備を進めてきた。しかし上記のように出版作

業に遅延がでてきたため、計画のシンポジウムについては2004年度以降の開催を目指して、準備を行っていきたい。これについては、海外出版という事情を受けて、海外を会場として開催する方向で検討をすすめていきたいとも考えている。

(3)〈その他〉また本研究班では、2003年5月にドイツマールブルクにおいて開催されるマールブルク大学神学部との共同研究会の準備に向けた研究作業にも現在協力している。これは1999年5月にドイツで開催された「第3回ルードルフ・オットーシンポジウム」、2000年から2001年にかけて大谷大学を会場にして開催されたマールブルク大学神学部との共同研究会に続く第3回目の共同研究会である。

1999年の第1回目の大会には、親鸞の『唯信鈔文意』の独訳を作成し、共通のテキストとすべくドイツに持参した。今回はそれに続き『教行信証』の「三つの序」を独訳し、親鸞の思想理解に資するための共同のテキストとして持参する予定である。現在その翻訳作業に協力しながら、注の作成等に着手している。また、共同研究会開催に向けて、同会のテーマを巡っての事前研究会などにも研究の多くの時間を割いている。

マールブルク大学との共同研究会の期日が差し迫っているために準備に追われ、冒頭から記した〈受信〉〈発信〉のいわゆる通常作業が実質上滞りがちとなっている。しかし、神学部との共同研究作業はこれまでの仏教研究に加えて新しい分野での研究交流の試みであるため、本研究班にとっても将来的に大きな成果が期待されることである。今後は国際仏教研究班全体の研究の進捗状況などを見据えながら、これら多くの課題にバランスよく着手していくように努力する必要があると思われる。

国際仏教研究

仏教・他宗教比較研究
—仏教とキリスト教の比較研究 並びに『教行信証』の独訳—

キャップ・教授　門脇　健
(宗教学)

本研究は、仏教とキリスト教の比較研究を通じて、浄土真宗を中心とする仏教が国際社会のなかでもちうる意味を把握することを目的としている。

このような目的を果たすために、本研究では、(1)従来必ずしも十分とは言えなかった、親鸞の諸著作を中心とする浄土思想文献のヨーロッパ語への翻訳、(2)研究者の緊密な相互交流、あるいはそうした相互交流の場の積極的な提供を、研究の二つの大きな柱としている。

2002年度は、以下の日程で、会議および研究会を開催した。

①2002年4月24日(水)、17時45分から。会議、2002年度の研究方針の決定（博綜館4F第二研究室分室2）。
②2002年5月8日(水)、17時45分から。研究会、『教行信証』の独訳（博綜館4F第二研究室分室2）。
③2002年5月22日(水)、17時50分から。研究会、『教行信証』の独訳（響流館4Fミーティングルーム）。
④2002年6月12日(水)、17時50分から。研究会、『教行信証』の独訳（響流館4Fミーティングルーム）。
⑤2002年7月3日(水)、17時50分から。研究会、『教行信証』の独訳（響流館4Fミーティングルーム）。
⑥2002年7月10日(水)、18時40分から。研究会、『教行信証』の独訳（響流館3F演習室6）。
⑦2002年9月19日(木)、11時から。研究会、『教行信証』の独訳（響流館4Fミーティングルーム）。
⑧2002年10月2日(水)、18時から。研究会、『教行信証』の独訳（響流館4Fミーティングルーム）。
⑨2002年10月15日(火)、15時30分から。ハンス＝マルティン・バールト教授公開講演会（響流館3Fメディアホール）。
⑩2002年10月22日(火)、16時から。ハンス＝マルティン・バールト教授ゼミナール（博綜館5F第二会議室）。
⑪2002年10月23日(水)、14時30分から。ハンス＝マルティン・バールト教授ゼミナール（博綜館5F第二会議室）。
⑫2002年11月13日(水)、18時から。研究会、『教行信証』の独訳（響流館4Fミーティングルーム）。
⑬2002年12月11日(水)、18時から。研究会、『教行信証』の独訳（響流館4Fミーティングルーム）。
⑭2003年1月8日(水)、16時から。研究会、『教行信証』の独訳（響流館4Fミーティングルーム）。
⑮2003年2月12日(水)、13時から。研究発表会（響流館4Fミーティングルーム）。
⑯2003年3月6日(木)、14時30分から。研究発表会（響流館4Fミーティングルーム）。

(1)親鸞の諸著作を中心とする浄土思想文献のヨーロッパ語への翻訳作業について。

①の会議において、2001年度にすでに翻訳と注解の作成作業を終えた親鸞の『教行信証』、いわゆる「三つの序」の「後序」および「総序」部分に引き続き、「別序」部分の独訳と注解の作成作業に取りかかることに決定した。

②から⑧の研究会では、実際に翻訳作業にあたり、それぞれ二時間程度を費やして「後序」の独訳を行った。

⑫から⑭の研究会では、翻訳作業に引き続き、同じくそれぞれ二時間程度を費やして「後序」に対する注解の作成作業にあたった。年度末には、「三つの序」の翻訳および注解全体の再確認を終え、SHINRAN, *Ken jōdo shinjitsu kyō-gyō-shō-monrui; Drei Vorworte* (Japanisch-Deutsch), Otani Universität, Kyoto として4月中に製本、公表するための準備作業に入った。

(2)研究者の緊密な相互交流、あるいはそうした相互交流の場の積極的な提供について。

これについては、それまでの相互交流の記録の整理作業と、今後の新たな相互交流の計画および具体的な準備作業を行った。

これまでの相互交流の記録の整理については、本研究では、すでに1999年度と2000年度の二度、ドイツ・マールブルク大学福音主義神学部との学術交流を行っている。このうち1999年度の記録については、ドイツと日本においてそれぞれ、*Buddhismus und Christentum—Jodo Shinshu und Evangelische Theologie*— (EB-Verlag, 2000)、『仏教とキリスト教の対話—浄土真宗と福音主義神学—』(法蔵館、2000年) としてまとめ、すでに公表をすませている。しかし2000年度の相互交流 (2000年10月にマールブルク大学からゲルハルト・マルセル・マルティン教授、マイケル・パイ教授、2001年3月には、ハンス=マルティン・バールト教授を大谷大学へ招き、共同研究会を重ねた) の記録 (『仏教とキリスト教の対話Ⅱ』) については、未整理のままであり、公表が遅れている。そこで、2001年度に続き、この記録を公表する作業を鋭意継続した。

今後の新たな相互交流の計画および具体的な準備作業としては、まず計画に関して、マールブルク大学との交流を継続発展することが最優先の課題であるという認識のもとに、1999年、2000年度の相互交流に続く三度目の対話として、2003年4月28日から5月4日まで、マールブルク大学において、大谷大学を代表する本研究班とマールブルク大学福音主義神学部との国際専門会議、第三回大谷大学・マールブルク大学学術交流シンポジウム「世俗化の挑戦に直面する仏教とキリスト教」を開催することを決定し、発表者、通訳担当者などの選定、またマールブルク大学との調整作業を行った。さらに、このシンポジウムの記録についても前二回の学術交流と同様、公表に向けて努力することに決定した (『仏教とキリスト教の対話Ⅲ』)。

具体的な準備作業としては、まず、サヴァティカル制度で来日中のハンス=マルティン・バールト教授を迎えて、大谷大学を会場とする研究交流会 (⑨の公開講演会、⑩⑪のゼミナール) を2002年10月に開催した。また、2003年1月から年度末にかけては、シンポジウムのドイツ側発表者の原稿を順次入手し、日本語への翻訳作業を開始した。加えて、日本側の発表予定者の事前準備として、2月と3月の各一回 (⑮と⑯)、研究発表会を開催し、4月からのシンポジウム開催に備えた。

仏教文献研究

西蔵語文献研究 —北京版西蔵大蔵経総目録のデジタル化—

キャップ・教授　兵藤　一夫
(仏教学)

本研究課題は、本学所蔵の西蔵語文献を整理・研究するとともに、貴重な文献を内外に紹介することを目的とする。そのために以下の作業を行った。

(1)北京版西蔵大蔵経目録の電子化

昨年度は、チベット語・サンスクリット語タイトル、北京、デルゲ、ナルタンの各版および金写テンギュルにおけるテキストの所在情報のデータ構築が終了した。今年度は

1．データの公開

2．著者名・翻訳者名のデータ構築

の2つの目標を掲げた。

1については、まず、本研究課題の Web ページを立ち上げることとした (http://web.otani.ac.jp/cri/twrp)。既に開設済みの Tibetan Language Kit for Macintosh のダウンロードのページに加え、新たに『ミラレパ伝』および『プトン仏教史』の電子データ公開のページを開設した。その上で、研究員の福田洋一氏が中心となってチベット大蔵経北京版オンライン検索のページを開設した。そこでは、チベット語タイトルから、北京、デルゲ、ナ

ルタン、金写のデータが検索できる。URLは以下のとおり。
http://web.otani.ac.jp/cri/twrp/tibdate/Peking_online_search.html

2について、より多くのデータ公開を見据え、既に入力のみ完了していた著者・翻訳者名のデータ校正を行った。著者・翻訳者名については、データ構築の際、同名者をどのように扱うかという問題が生じる。たとえばテンギュルにはコロフォンにKlu sgrubによって著わされたと記されている顕密にわたる数多くの論書があるが、それがすべて同一の人物によって著わされたのかというと、即断できない。また、略称で現れる場合もそれが誰であるかの判断や、正しい名前に還元することには慎重を要する。そこで今回は、この種の同定問題については保留という形とし、入力の原本とした「勘同目録」の記述のまま校正作業をすすめることとした。この作業は、研究補助員を中心にしながら、大学院生のアルバイトを加えて進められた。諸氏の努力により、年度内にほぼ作業は完了した。

一連の作業の過程で、北京版を本学に将来した寺本婉雅直筆の目録3冊を図書館で見いだした（図書館請求記号：21／1242）。各冊の見返しには、1911年に執筆した由がチベット語で記されている。第1冊目には、「西蔵大蔵経将来之顛末」と題する寺本自身による北京版将来の由来が記されている。寺本によるこの種の記述としては、弟子の横地祥原氏の編になる『蔵蒙旅日記』（芙蓉書房、1974年）所載のものが知られているが、それと比較するに今回のものは、若干異なり、今後の研究を待つべき資料であると思われる。よって、この「顛末」については、次回のデータ公開の際にあわせて公開できるよう翻刻を進めることとした。

(2)Tibetan Language Kitのバージョン・アップ

本研究課題が開発したMacintosh上でのチベット語入力システムであるTibetan Language Kitを、最新のMac OS Xに対応させるためのバージョン・アップ作業は、嘱託研究員・Steve Hartwell氏を中心として進められた。氏による1年間の作業報告を受け、2003年度内リリースにむけての方針が決定された。

(3)その他

チベット・ラサの研究機関との協力態勢を築くため、嘱託研究員・三宅伸一郎をラサに派遣、氏は現地の研究機関である西蔵社会科学院・所長とも面会し、研究上での協力体制構築についての話合いを行った。また、デプン寺等のチベット古写本の現状と、その整理状況を視察した。

中国蔵学研究中心・宗教研究所所長であるダムドゥル氏が、本年度12月15日から3月15日までの3ヶ月間、客員研究員として研究所に滞在された。ツォンカパの主著『ラムリム・チェンモ』の現代中国語訳を課題とする氏が滞在期間中の指導教員として選んだのは、本研究課題の研究員でもあるツルティム・ケサン教授であり、またその研究分野が直接関わることもあって、滞在中ほぼ毎日、本研究課題のメンバーは氏と顔を合わせ、おおいに刺激を受けた。

とりわけ、自身の研究に多忙な中、研究補助員やアルバイト等のために週2回程度現代チベット語会話のレッスンを行っていただいた。また、中国蔵学中心や西蔵社会科学院をはじめとする中国国内におけるチベット研究機関の現状についての報告を、公開研究会という形でおこなっていただいた（2003年2月12日）。学内外からの多数の参加者もあり盛会であった。このような形でチベット人の研究者を招待し、滞在してもらうことが研究遂行上いかに有意義なことであるかということを本研究課題のメンバー一同、再確認させられた。

仏教文献研究

パーリ語文献研究
—大谷大学所蔵貝葉写本 Paññāsajātakaの校訂・翻訳—

キャップ・教授　吉元　信行
（仏教学）

本研究は、タイ王室から贈られたとされる大谷大学図書館所蔵の数多な南方仏教貝葉写本（大谷貝葉）の中で、特に稀覯文献と思われる『パンニャーサ・ジャータカ』（50のジャータカ）と呼ばれるパーリ語貝葉写本の体系的、文献的研究である。

パーリ語で書かれた『パンニャーサ・ジャータカ』は東南アジア各地に伝えられており、それらはビルマ文字、クメール文字、タム・ラーンナー文字、モン文字等で貝葉に書かれ、各地の寺に保存されてきたものである。この『パンニャーサ・ジャータカ』のうち、ビルマ文字で伝えられたZimme版はイギリスのPTS協会からP.S. Jaini氏の編纂により既に出版されているが、大谷貝葉

はそれとは別の系統でタイやカンボジア等においてクメール文字で伝えられ、タイトル、その順序、あるいはその内容にかなり異同のあるクメール版であり、本研究を行う価値は高い。大谷貝葉には、この50のジャータカのうち、26のジャータカが収められている。既に平成8—9年度本研究所共同研究と平成10—12年度文部省科研によって、そのうちの9ジャータカをローマナイズし終え、嘱託研究員田辺和子氏将来のバンコク国立図書館所蔵のマイクロフィルムとの照合によって、そのTransliteration及びその翻訳研究をほぼ完成することができた。本研究はその継続研究として、研究員、嘱託研究員、研究補助員及び内外の研究者の協力を得て、Transliterationの一部を校訂版として完成させるとともに、まだ着手していない17ジャータカのTransliteration、翻訳、研究を実施し、学界に公開していこうとするものである。関係者各自が分担している各ジャータカのTransliterationは現在進行中である。

それに関連して、本年度は、The International Association of Buddhist Studies（国際仏教学会：12月8日—13日於タイ・バンコク）にて研究員吉元信行と嘱託研究員長崎法潤氏、同田辺和子氏が大谷貝葉の『パンニャーサ・ジャータカ』に関する発表を、また研究員荒牧典俊氏も関連分野での研究報告を行なった。これによって、これまで世界的に知られるパーリ語貝葉写本の研究としては、Peter Skilling氏を中心とするPTS（パーリテキスト協会）とJacqueline Filliozat氏を中心とするEFEO（フランス極東学院）があったが、それらに並んで、日本の大谷大学でも貝葉写本が研究されていることを世界の学界に周知させる機会となった。

またその過程で貝葉の研究者であるEFEOのJacqueline Filliozat氏と接点ができ、彼女の協力により、彼女のタイ・バンコクでの調査期間のうち、2003年3月2日から12日にかけて、嘱託研究員田辺和子、研究補助員清水洋平両氏が、バンコク・ワットポー寺院にてパンニャーサ・ジャータカを初めとするクメール文字版の貝葉を写真撮影することに成功した。それはワットポー寺院の長老でありマハーチュラロンコン大学教授でもあるVen. Thiab Malai師の協力によるところも大きい。

このワットポー寺院所蔵の貝葉写本はタイ王室コレクションであり、ワットポー寺院に贈られてからこれまで誰も手に触れることがなかったほど貴重なものである。その内容を管見したところ、非常に読みやすいパーリ語で書かれているため、大谷貝葉と田辺和子氏将来のマイクロフィルムだけでは判読の難しかったジャータカを読む上で非常に役立ち、今後本研究の進めるTransliteration及び校訂、翻訳、研究を行う上で非常な貢献をなしうる資料である。

またEFEOでは、以前から『パンニャーサ・ジャータカ』の研究を行なっているが、2002年10月に、そこからCD-Rが届けられた。それにはクメール文字で書かれたEFEO所蔵の『パンニャーサ・ジャータカ』が収められ、まだ出版されていないものである。これも判読可能なクメール文字によるパーリ語で書かれているため、判読の難しいジャータカを読む上で役立つ資料であり、本研究のTransliteration及び校訂、翻訳、研究を進める上で有益である。以上の如く、本年度は、本研究班と海外の研究者との国際的交流、あるいは海外調査などにより、本研究を推進するうえの数多くの得がたい資料を収集することができた。

また2002年度、本研究会は9回の定例研究会を行なったが、一般公開した研究会は次のとおりである。

・2002年6月27日；茨田通俊（研究協力者・東方研究会研究員）：
「大谷貝葉Dulakapaṇḍita-jātaka考」
・2002年10月31日；飯島明子（天理大学国際文化学部助教授）：
「タイ・ラオスにおける貝葉写本」
・2002年12月19日；
①村上晋弘（大谷大学大学院修士課程第2学年）
「大谷大学所蔵貝葉写本文献Dukammānika-jātakaの文献的研究」
②村西弘行（大谷大学大学院修士課程第2学年）
「大谷貝葉写本：Cāgadāna-jātakaについて」
・2003年3月17日；田辺和子（嘱託研究員）・清水洋平（研究補助員）；
「バンコク・ワットポー寺院所蔵の貝葉写本の調査ならびに撮影報告」

このうち飯島明子氏はタイ・ラオスを中心に東南アジアの歴史を研究されているが、その発表の中で、自身の研究成果の目録の中にこの地域における『パンニャーサ・ジャータカ』の名が存在していることを指摘され、この時期の東南アジアの中心はチェンマイであるから、タム・ラーンナー文字やラオス文字で書かれたこの地域の『パンニャーサ・ジャータカ』との比較研究も必要であるとの提言をされ、本研究の進展に大きな示唆を与えてくれた。

ラーンナー版やラオス版は今までEFEOの目録のみで確認でき、その後、EFEOが紛失したといわれるものであり、ラオスの鎖国政策により外国人は今まで実物を見ることができなかったものである。そしてラオスやタイ北部のラーンナー文字文化圏は、当時上座仏教が栄えていた中心地と考えられるため、その現地調査を行うこ

とも本研究を進める上で必要となった。それは今後の課題となろう。

さらに今後の研究課題として、まず大谷大学図書館所蔵の貝葉写本及び同系統の写本群が経典として持つ資料価値を、いっそう明らかにしていく必要がある。

次に同系統の写本群の中で大谷大学図書館所蔵の貝葉写本が、これまでに収集されてきた写本資料との比較の中でどのような位置付けを持つものなのかを明らかにしていく。

そのために現在進行中の『パンニャーサ・ジャータカ』のTransliterationを完成した上で、その校訂版（critical edition）の作成を行なうことが必要となる。

また、その校訂版に基づいて翻訳作業を進めていかなければならない。しかしそこにも課題が山積している。既にタイから出版されているタイ語訳があり、このタイ語訳は偈頌の部分だけがパーリ語になっているため、それをどのように活用していくかが課題である。またEFEO（フランス極東学院）の『パンニャーサ・ジャータカ』に関する研究の蓄積をどのように、この研究に活用していくかも考慮しなければならない。

このような研究課題の問題点を解決しながら、今後さらに研究員、嘱託研究員、研究補助員及び内外の研究協力者たちによるTransliteration、校訂、翻訳、研究などの作業を進めていく所存である。

仏教文献研究

和漢文献研究
—大谷大学所蔵稀覯典籍の調査と公開—

キャップ・教授　木村　宣彰
（仏教学）

本研究は、本学が所蔵する膨大な和漢文献について調査し、その中の特に重要なものを選んで公開することを目的としている。本年は昨年から継続している漢文仏教文献の調査に加えて、2003年10月開館予定の「大谷大学博物館」に収蔵すべき文献の調査も行うこととなった。したがって本年度の本研究班の研究目的はつぎの三点に要約できる、①本学所蔵の漢文仏教文献に関する調査研究、②本学所蔵の和漢文献における善本の選定、③博物館資料の選定に関する研究、である。これらの課題について、①②を昨年来の漢文仏教文献研究班が担当し、②③を和漢文化財班が担当することとした。

漢文仏教研究班は、昨年度に引き続き中国撰述仏典についての調査を進めた。その過程で、『卍続蔵経』の目録データベースを完成させた。中国撰述仏典については、前年度すでに報告したようないくつかの問題点は依然として残るものの、主要な典籍の殆どが複数の叢書に収録され公刊されており、先人の努力によって、研究基盤はかなり整備されていると言うことができる。この点については今回作成した『卍続蔵経』の目録データベースを基盤にして諸本の調査を重ねていくつもりである。これに対して、日本撰述仏典研究の状況を見れば、未だ基礎的な作業すら十分には為されていない状況にある。そこで、まず『日本大蔵経』未刊本の検討を行った。これらは、一度は叢書に収録される計画が立てられたものであり、その典籍の価値には一定以上の評価が与えられていると考えられるからである。特に、江戸時代の仏教界においてエポックメイキングな存在であった、霊空・鳳潭・普寂・癡空などの人々の著作に焦点を当てて検討した。『日本大蔵経』未刊本に、霊空の著作としてあげられているのは『（合刻）金剛般若経疏俗談　一巻』『教行枢機　一巻』『金剛経破空論俗談　一巻』『止観大意講録　一巻』『始終心要略解　一巻』『寿量義説　一巻』『天台伝仏心印記箋要　一巻』『法華経開題　一巻』『法華文句記講録　五十巻』『摩訶止観輔行講録　二十三巻』の10部、鳳潭の著作としてあげられているのは『楞伽〔阿跋多羅宝〕経会玄記　一巻』『因明入正理論疏瑞源記　八巻』『円宗鳳髓　一巻』『華厳一乗教分記輔宗匡真鈔　十巻』『華厳五教章匡真鈔　十巻』『華厳字輪毘盧法身観』『華厳入法界品字輪頓証毘盧遮那法身観　一巻』『講儀斥謬　一巻』『五教章匡真鈔　十巻』『（南膽部州）万国之掌菓図　一帖』の10部、普寂の著作としてあげられているのは『華厳五教章衍秘鈔　五巻』『華厳法界玄々章　一巻』『五教章衍秘鈔　五巻』『法界無差別論疏示珠鈔　一巻』『遺教経論略疏　一巻』の５部、癡空の著作としてあげられているのは『般若波羅蜜多心経講要　一巻』『〔因明〕三十三過本作法犬三支　一巻』『円頓章講義　一巻』『義学接要　一巻』『後世ノ路ノ枝折　一巻』『金剛 開講要義　一巻』『金剛 科解　一巻』『止観大意講録　一巻』『始終心要略談　一巻』『天台伝仏心印記饒舌談　二巻』『密門雑抄　一巻』『法華玄義釈籤傍註　十巻』の12部である。さらに、鳳潭の著作に関していえば、『仏書解説大辞典』に挙げられているものだけでも、49部に上る。現在叢書に収められるものと『日本大蔵経』未刊本を併せてもわずかに19部のみにとどまるのである。そして調査の結果、本学図書館には鳳潭の殆どの著作を有してい

ることが明らかになったのである。

以上のように、江戸時代の仏教を考察する上で本学図書館が果たしうる役割は甚だ大きいのである。しかしながらこれらの諸典籍は一応、普通書として登録されており、必ずしも本学のみが有するものというわけではない。そこで本学の独自性という視点からさらに調査を加えた。そこで注目されるのが、本学所蔵の解脱貞慶撰『法華開示抄』である。『法華開示抄』は、『大正新脩大蔵経』第56巻にも収められているが、『昭和法宝総目録』中の「続大正新脩大蔵経勘同目録」に依れば、「薬師寺蔵写本」を底本とし、対校本として大日本仏教全書本を用いていることにも表われているように、諸本の閲覧は容易ではない。このような状況において、本学図書館には、康永貞和年間写（余甲32）・貞治応安年間写（余甲33）・承応年間已後写（余丙17）・写本（余丙19）と、四本を所蔵しており、本書を研究するに当たっては、他に類例のない恵まれた環境を有していることが明らかになった。そこで、これら四本を実地に確認したところ、「妙荘厳王本事品」が四本ともに揃って伝わっているので、まずそれを比較検討することにした。その結果、いくつかの点が明らかになったが、この点はかなり細かい点にわたるので機会を改めたいと思う。

また、仏教系六大学で組織している「大蔵経学術用語研究会」においては、本研究の研究課題である仏教文献の調査と公開という課題を共有して、六大学が所蔵する仏教文献のデータベースを構築するように提案している。仏教書に関して、現在最もまとまったものとして用いられているのは小野玄妙編『仏書解説大辞典』全15巻（大東出版社）である。しかしながら、その後のめざましい目録整備や諸研究の進展を考えると、これらをもう一度整理する必要性が痛感せられるのである。こうした課題は、一朝一夕に成る事業ではないが、現代では紙媒体によらずとも、ネットワーク上の電子情報として公開することができ、情報の追加・訂正が比較的容易にできるという利点がある。そこでまず、仏教系六大学が所蔵する仏教典籍を公開し、その輪を順次広げていくことで『日本仏書総目録』といったものをめざそうと提案しているところである。

和漢文化財部門では、本学所蔵の典籍および典籍以外のものの中から博物館に供し得る資料を調査し選定すること、本学所蔵の和漢典籍のうちより善本を選定し、刊行公開すること、の2点を主な研究内容とした。

前者については、別に組織された博物館準備会との合同検討会を数度実施し、選定方針を検討した。その結果、①特に貴重であり、厳重な管理が望ましいもの、②恒温・恒湿など、保存環境として博物館収蔵庫が適当であると考えられるもの、③形態的、内容的に博物館の管理が適当であると考えられるもの、④博物館の設置目的に合致し、必要であると考えられるもの、の4点を博物館資料選定の基準として確認した。図書館所蔵品に関しては、重要文化財7点、貴重書（甲乙丙丁）、「特貴」指定資料、「参貴」分類の中国古硯、「品」分類の資料、「特」分類の軸装資料、北京版西蔵大蔵経、貝葉経典、中国古印、封泥などが該当する。

後者については、善本選定にあたって、これまで図書館で展観に供された資料の出品頻度等を検討するために、「図書館展観目録データベース（仮称）」の制作を企図した。図書館では、近年、定期的に新入学歓迎展をはじめとして、安居・オープンキャンパス・学園祭に協賛した展観を行っているが、それ以前より学内行事および学会開催にあたっても多くの協賛展観を開催している。今回、展観目録等の関連資料を入手しできたものだけで90回以上の展観となっている。その内容は、本学学舎が現在地で落成した、1913年（大正2）11月9日・10両日に展観された「真宗大谷大学付属図書館古書展観会陳列目録」が最も古いもので、次いで1934年（昭和9）5月の「一柳知成氏蒐集孝教諸本展観目録」、同年11月の「親鸞聖人御真蹟複写本並ニ教行信証諸版本　展観目録」から2001年10月の「大谷大学近代化100周年記念資料展目録」「日本古文書学会大会協賛展観目録」まで至る展観目録である。90点をこえる展観目録をデータ入力するにあたって、作品の出品頻度と年代的傾向などの分析が可能となるよう書式を、数度の打ち合わせ会で検討し、データベース入力作業を進め、ほぼ入力を終え、「図書館展観目録データベース（仮称）」（稿）ともいうべきデータベースを制作した。

現代思想研究

大谷大学FD研究
—大谷大学におけるFDの基礎構築—

キャップ・教授　並木　治
（フランス文学）

「大谷大学FD研究」は、2002年度で、最終年度の4年目を迎えることとなった。研究活動は、年度を通じて、基本的にこれまでと同様、ワークショップ型の公開研究

会を中心として行われた。研究会では学内外の話題提供者による事例報告と問題提起を中心とし、それに続く質疑・討論を通じて、人間的関わりを大切に考える本学FDのあり方を、さまざまな観点から深め、共有することを方針とした。

もとよりFDには、大学構成員同士の連帯と心のコミュニケーションが肝要である。2002年度は、この「関わりあいによる活性化」のテーマでさらなる前進をはかるべく、それなりの工夫をこらしたつもりである。

2002年度の学内研究員としては、前年度の織田顕祐、高井康弘、藤嶽明信、浦山あゆみ、ディディエ・ヴェステル、浅若裕彦、谷口奈青理、吉田孝夫、東舘紹見の諸氏に加え、村瀬順子、ロバート・F・ローズ、芦津かおり、山本和彦、村山保史、田中裕喜の計15名の諸氏にお願いし、ほぼ全学科横断型の研究員体制を組むことができた。

嘱託研究員としては、まずこの分野の第一線で活躍されている中村博幸先生（京都文教大学）にお願いした。

また新たな試みとして、本学でも生きた語学教育のFDが求められていることをふまえ、前ランカスター大学英語教育チューター兼コーディネーターで、大谷大学の英国研修で本学学生がお世話になったジュディス・R・アイレット先生にも嘱託研究員をお願いすることができた。この件は、正直なところ大学当局からの要請と支援によって実現したものだったが、研究班としてもこれをまさに時宜を得た委託ととらえ、村瀬教授を中心に受け入れ体制を整えた。アイレット先生は、本学の集中科目講師をかねて英国から招聘し、自由科目・英語の集中講義と、授業参観と討論を中心とした英語教師向けの研修を並行して行っていただいた。研究全般のとりまとめ役のキャップは、前年度に引き続き並木がつとめ、研究会の企画と学会FD活動との連携を中心にお世話をさせていただいた。研究班庶務については谷口奈青理氏に引き続きお引き受けいただいた。

大学教育全般にわたるFDに関し、2002年度に開催された研究会の日時とテーマ、話題提供者は次のとおりである。

第1回：6月11日㈫午後6時より
「FDのさまざまな種類と考え方—本学のFDの方向性をさぐるヒントに—」
発表者：中村博幸氏（京都文教大学）

第2回：6月26日㈬午後6時より
「FDのさまざまな種類と考え方—大谷大生によるブレーンストーミングの実践—」
講師：中村博幸氏（京都文教大学）

第3回：7月12日㈮午後6時より
「授業者の方法に関する一試案—大人数講義や少人数演習の事例研究—」　発表者：崎野　隆氏（本学）

第4回：10月10日㈭午後6時より
「FDを核とした大学づくりを考える」
発表者：滝川義弘氏（本学）

第5回：11月14日㈭午後6時より
「演習授業活性化の試み—学生の主体的学びの場として—」　発表者：ロバート・F・ローズ氏（本学）

第6回：12月20日㈮午後6時より
「教育実習生の反省録から考えさせられる授業方法についての一試案」　発表者：崎野　隆氏（本学）

第7回：1月24日㈮午後6時より
「考えさせる教育の工夫—河合塾講師による多摩大学での実践例—」
発表者：成田秀夫氏（河合文化教育研究所）

それぞれの内容の詳細に関しては『2002年度FD報告集』をご参照いただきたいが、特に目立った点、報告できなかった点について若干補足してみたい。

第2回目の研究会では、前年度に、京都文教大学の学生諸氏とともにおこなっていただいた基礎ゼミ模擬授業をベースに、今度は本学文学部学生約10名を対象にブレーンストーミングの模擬授業を、同じく中村先生にお願いした。こうした実験は本学では初めてのことでもあり、事前に若干の不安もないわけではなかった。しかし当日の研究会は、結果として、日頃あまり経験したことのないほど活気あふれる数時間となった。終了後、学生諸君も交え授業を考える機会がもてたことも、きわめて刺激的で有益であった。

第3回目の崎野氏の発表は、近年の教室内外の大きな状況変化をふまえたものであったが、中村氏とは異なった観点からの教育本質論的ご提案であった。教師が主導的立場は堅持しながら大人数講義や少人数演習を効果的に進めるためには、教師側の教育哲学と、教師によるさまざまな工夫やイメージづくりが重要であることを力説された。発表終了後も、大学教育そのもののあり方や教育哲学についてきわめて活発な質疑応答が行われた。当研究班が当初から目指してきた、心のコミュニケーションを基盤に据えたFDを考えるうえでも有益な機会となった。

第4回目の研究会では、話題提供をはじめて教員以外の滝川氏（本学教育研究支援課長）にお願いすることができた。「アカデミック・リゾート」としての大学論をベースに、新たな大学教育観を示されたが、それに関する発言も、1回の研究会では収まりがつかぬほど活発で

あった。今日、教員と事務職員との連携がこれまでにも増して強く求められているなかで、両者間の意識のズレも多少明らかになったが、その点をも含め、今後の信頼関係の構築や、いわゆるSDとFDとの協力関係を展望するうえで、滝川氏は貴重な機会を提供されたといえる。

また、先に報告したように、新企画として、9月の集中講義期間を利用した英語教育研究会も行った。人間味豊かなアイレット先生の授業は、学生たちにその英語レベルの高低を越えて、強く訴えかける力をもっていた。その方針は、「心のコミュニケーションによるFD」というこれまでの本研究班の研究方針ともまさに重なるものであった。授業観察をふまえた研究会も、従来の枠を越えて「授業」を考える刺激的な機会であり、この点では、上に述べたFD研究会とまさに同じ性格をもつものであった。

この研究会の日時とテーマは下記の通りであるが、第1回目の授業は、William Sarouyanの短編を材料にして、学生たちの子供時代の思い出を引き出したり、デスカッションをさせたりする授業、第2回目は、詩をばらばらにしたものを学生たちがつないでいったり、音声テープを映像と結びつけたりする授業、第3回目は、簡単なドラマを学生たちに朗読させることを中心とした授業で、その後の研究会では、それぞれの授業についてのみならず、ひろく英語教育全般にわたる問題点についてそれぞれ活発な意見交換が行われた。第4回目の研究会では、これまでのさまざまな授業法に加えて、最近では主流となってきたコミュニカティブ・メソッドについての発表が、第5回目の研究会では、EAPのカリキュラム紹介と、ノートのとり方、課題のこなし方、レポートの書き方などを含む、導入的教育の具体的なあり方などについて、非常に具体的かつ興味深い発表が行われた。

第1回：9月10日㈫授業参観：午後1時より／
　　研究会：午後3時30分より
　　「イギリス文化とコミュニケーション(1)」
第2回：9月12日㈭授業参観：午後1時より／
　　研究会：午後3時30分より
　　「イギリス文化とコミュニケーション(2)」
第3回：9月13日㈭授業参観：午後1時より／
　　研究会：午後3時30分より
　　「イギリス文化とコミュニケーション(3)」
第4回：9月18日㈬午後2時より
　　「英語教授法―理論と実践―」（講演）
第5回：9月20日㈮午後2時より
　　「基礎教育としてのEAP」（講演）

以上、大学教育全般にわたるFD研究会と、英語教育に特化したFD研究会に関して、おおよその報告を試みた次第である。

総じて、この4年目に至って、多様な学生層のそれぞれに目を向けたFD、一人一人の資質に応じた達成感、満足感、ひいては学びの自信と豊かなコミュニケーション能力の獲得のためのFDを目指すというこれまでの方向性が、研究員や研究会参加者の間でいっそう共有できたと考える。しばしば研究会は、その活発な質疑のため3、4時間にもわたるほどだった。

2002年度の研究成果の公開という点については、各方面からの暖かい支援により、前年度に引き続き「FD研究報告集」の刊行を年度末に実現することができた。

前後するが、9月の仏教哲学系大学会議教員研修部会では、これまでの研究をふまえ、キャップが「FD開発の進め方」と題する報告を行った。（詳細については、機関誌『如是我聞』第9号、31頁～37頁を御参照いただきたい。）

さらに、年度末の大学コンソーシアム京都主催「FDフォーラム」の第2分科会「意欲喚起と動機づけ」の企画・立案にも、これまでの本学FD研究班の研究成果が基本的に反映されていることを併せて報告させていただく。

指定研究「大谷大学FD研究」は2002年度をもってひとまず完結したが、FD自体は、人間コミュニケーションを軸とする大谷大学にとって不可欠なものであるといえる。その更なる前進と展開を切に願いつつ、2002年度の研究経過報告を終わりたい。

現代思想研究

大谷大学DB研究
―大谷大学におけるDBの基礎構築―

キャップ・教授　草野　顕之
（日本史学）

本研究は、大谷大学におけるデータベース構築の全学的な視野からの検討とデータベース構築の具体的な実施、およびその公開方法についての検討を行なうものである。本年度は、昨年度に引き続いてデータベース構築

の根幹を為すデジタル画像の制作に向けて、研究及び実作業を行なうと共に、文化財のデジタル化及びその提示方法に関する諸問題を検討し、デジタル画像の作成からデータベースの公開に至るまでの全体行程を視野に入れつつ、問題点の指摘とその解決を目指した。

【スキャニング作業】

草野・片岡・松川各研究員の指導のもと、研究補助員（有松）とアルバイト５人が、清沢班が西方寺にて撮影してきた35ミリポジフィルムの移管をうけ、今年度も引き続いて高精細スキャニング及びデジタル化作業を行なった。また、11月からは新規アルバイト５人を加え、作業の円滑化・効率化を図っている。今年度は49本をスキャンし、新たに55本の移管を受け、そのうち27本のスキャニング作業（デジタル化）が終了している。

現時点での問題点としては、スキャニング作業室の環境、とくにチリ・ホコリ対策に神経を使っている。せっかく高詳細スキャニングを行なっても、フィルム面にホコリが付いていることが屢々あり、その場合は再度やりなおさねばならない。作業員が静電気防止の服装をするとか、出入り口に粘着マットを敷くという対策により、かなり防塵対策は功を奏しているが、一層の改善を目指している。

【図書館蔵貴重書撮影作業】

本年度の前半は図書館移転作業に伴う作業室改装のため撮影作業を中断していたが、後半からは新たに図書館２階の一室を暗室仕様にしてもらい、高精細画像撮影用のカメラ一式・撮影台一式・ストロボ一式による図書館蔵貴重書撮影作業を10月から再開した。しかしながら、作業環境の変化に伴い、撮影面の露光ムラ除去のためのデジタルカメラ・ニコンＤ１によるテスト撮影を続ける必要が生じた。このテストは３月末の時点では完了しなかった。

【学内研究会活動】

作業と並行して、研究員・補助員・アルバイトが意見を交換することを通して個々の作業についての理解を共有するために、同時にデータベース研究班の研究内容を広く学内に知っていただく目的で、学内公開研究会を以下の日程で開催した。

（通算）第11回　６月28日㈮17：50　於：3101教室
「音声のデジタル化に関わる諸問題」　片岡　裕

第12回　11月１日㈮17：50
於：響流館３階マルチメディア演習室
「音声データのデジタル処理：北里蠟管の概要」
山本貴子

第13回　12月13日㈮17：50
於：響流館３階マルチメディア演習室
「高精細デジタル画像スキャニングの実際
―現場からの報告―」　有松志保

以上、計３回の研究会を回顧してみると、今年度は、従来より推進している貴重書籍のデジタル画像化とともに、「北里蠟管」という音声資料のデジタル化に関わる諸問題について、大きな収穫があった。北里蠟管には、アイヌの語り物をはじめとし、沖縄・台湾・南方諸島において20世紀前半に収録された貴重な音声資料があり、これを高品位再生し、保存のためにデジタル化しておくことは重要である。

【来年度に向けて】

来年度も引き続き、西方寺蔵の清沢満之自筆本のデジタル画像化、図書館蔵貴重書（北京版西蔵大蔵経、チベット語蔵外文献など）のデジタル画像化を進めていく。同時に、来年度は、大谷大学図書館に所蔵される「北里蠟管」のデジタル化について、さらに検討を重ねていく所存である。

2002(平成14)年度「一般研究」研究結果概要

共同研究

『十門弁惑論』の研究

教授　一色　順心
(仏教学)

『十門弁惑論』3巻は、大慈恩寺の復札が太子文学権無二の質問に応えて表した護教論文という性格をもつ。経籍をつかさどる役職にあった権無二が、復札に、仏教に関する十カ条の質問状を提出した。それに対して、「太子の文学権無二の釈典稽疑に答う」とあるように、復札が仏教者の立場から弁惑を試みたものである。

復札という人物について、筆者は以前に「復札法師の伝記とその周辺」(『仏教学セミナー』所収)を発表したことがあり、かねてより彼の仏教思想には関心を抱いてきた。復札(生没年不詳)は、華厳宗の大成者である法蔵(643—712)とほぼ同時代の人であり、武周朝期の訳経事業に重要な役割を果たしたといえる。そのことは、各種の「経録」や「高僧伝」などに「復札」の名が見えることからも窺える。彼は、実叉難陀・地婆訶羅・菩提流志などが経典を翻訳する際に、法蔵らとともに訳場に参画していたのである。

また、彼は「真妄頌」という短文を作成して、当時の識者たちに「真妄」の関係について問題を投げ掛けた。その解答としては、澄観(738—839)や宗密(780—841)のものが残されており、復札の思想と後代の華厳教学との関わりも注目されるといえる。

『十門弁惑論』における「十門」とは、次のようなものである。

「通力上感門一」「応形俯化門二」「浄穢土別門三」「迷悟見殊門四」「顕実得記門五」「反経讃道門六」「観業救捨門七」「隨教抑揚門八」「化仏隠顕門九」「聖王興替門十」

十門の各門は、権無二の質問(稽疑)と、それに対する復札の「弁惑」という内容になっている。中国において本書が伝承されていたにもかかわらず、これが研究された形跡は意外と少ない。ただ、永明延寿(904—75)が、『宗鏡録』巻89(大正48・901a)に「化仏隠顕門九」の文、巻100(大正48・952b)に「観業救捨門七」の文を引用していること、さらに、巻51(大正48・440b)に復札の「真妄頌」の内容を紹介していることが注目されるところである。

本書についてのまとまった研究は、江戸時代に我が国の知空や、それに続く臥雲によってなされた。臥雲の著した註釈書に『十門弁惑論纂述』3巻6冊(寛保2年刊)があり、知空の解釈をふまえつつ、かなり詳細な註釈が加えられている。

本年度の本研究では、『十門弁惑論』の文のみではなく『纂述』の文をも併せて輪読することにより、唐代の知識人権無二が仏教に対してどのような疑問を抱き、それに対して復札がどのような仏教思想をもって答えているのかを解明することに努めた。年度末に至るこの1年間で、十門のうち「通力上感門一」から「反経讃道門六」までをほぼ輪読し終えることができた。それを通して見えてきたことの一つは、権無二の「稽疑」と復札の「弁惑」の文中には、「易経」「論悟」「老子」「荘子」などの外典が巧妙に用いられていることから、両者の問答には仏教のみならず幅広い中国思想の素養を窺うことができることである。復札の答え方には、仏教に基づいて正統に答える場面があるとともに、外典の言葉を用いながら仏教内の問題を説明しようとする面が見受けられる。そのことは、彼が中国の識者であった権無二に納得しうる答えを与えるために取られた有効な方法であったのであろう。

復札の生きた時代が、八十巻本『華厳経』の翻訳の時期と重なっており、法蔵と同時代であることを考えれば、本書と『華厳経』との何らかの関わりが問題になるといえる。しかし、本書の前半部分の問答を見るかぎり、菩薩の「十地」という用語が使用されているものの、『華厳経』についてはあまり触れられているとはいえない。むしろ、『維摩経』『法華経』『涅槃経』といった大乗経典の所説を題材として、問答を組み立てていることに特徴があるといえる。そして、復札自らが引用する経典としては、『首楞厳経』『央掘魔羅経』『文殊師利仏土厳浄経』(「応形俯化門二」)、『大方便仏報恩経』(「顕実得記門五」)などの名が見られるのである。

本書の前半部分を見るとき、「割注」の箇所に、「吉蔵師の云わく」とあって、三論宗の吉蔵(549—623)が著した『維摩経義疏』などの文を引用していることも、本書の思想を考えるうえに示唆を与えるものではなかろうか。

本年度の研究をふまえて、次年度に本書の後半部分を解読することにより、『十門弁惑論』における復札の仏

教思想の全体像を究明することとしたい。そのうえで、その研究成果を何らかのかたちで公にしたいと思っている。

個人研究

ジェイン・オースティンの文体論的研究

助教授　浅若　裕彦
（英文学）

本研究の目的は、ジェイン・オースティンの技法的な面での特徴を、自由間接話法及びその他の話法の用い方を中心に考察し、イギリス小説の歴史の中における彼女の位置付けを探ることである。そのため彼女と同時代、あるいは近い時代に活躍した作家の作品との比較を行った。比較した作品は、ヘンリー・フィールディングの *Tom Jones*、マライア・エッジワースの *Belinda*、サミュエル・リチャードソンの *Sir Charles Grandison* である。なお、話法への言及は Geoffrey N. Leech & Michael H. Short の提案した枠組みに従い、登場人物の発話の再現法については語り手のコントロールの強いものから順に、narrative report of speech acts (NRSA), indirect speech (IS), free indirect speech (FIS), direct speech (DS), free direct speech (FDS), また同様に思考の再現法については、narrative report of a thought act (NRTA), indirect thought (IT), free indirect thought (FIT), derect thought (DT), free direct thought (FDT) というそれぞれ五つのモードを設定する。Leech & Short は、発話の再現法については DS を、思考の再現法については IT をそれぞれ norm としているが、本研究ではこの norm については考察の枠組みから外すこととする。

まず登場人物の発話に用いられる語彙について比較してみると、オースティンは方言や非標準的な発音を表す綴りの使用に対して慎重な態度を取っていることが分かる。これは例えば *Tom Jones* における Squire Western や *Belinda* における Juba の描写とは対照的である。オースティンは、人物描写がステレオタイプに陥ることを良しとしない作家であったが、その警戒心がこの点にも表れていると考えられる。

次に引用符の用い方に注目してみる。オースティンの時代には、まだ現代英語の標準的な使用法が確立しておらず、注意が必要である。18世紀の小説では、直接話法だけでなく、自由間接話法や間接話法にも引用符が用いられることが珍しくない。また、リチャードソンは、引用の中の引用に限定して引用符を用いる傾向がある。オースティンの作品には、FIS から引用符のついた FIS に話法が移行する例がしばしば見られるが、こうした場合、引用符のついた FIS の方がついていないものよりも DS に近いものとして用いられているように思われる。他の作家の作品には、このような使い分けは見られない。

エッジワースの作品中の FIS に見られる特徴の一つは、間接話法のように、"he said" や "she said" といったような伝達節や、接続詞の "that" がついてるものが多い、ということである。フィールディングやリチャードソンの作品には、"that" のついているものは少ないが、伝達節のついているものは珍しくない。しかしオースティンの作品にはこのような例はまれである。そしてこうした特徴をもつ FIS は、19世紀以降はあまり見られなくなっていく。この点でオースティンは、18世紀から19世紀への橋渡しの役目を果たしていると言えるかもしれない。

フィールディングやエッジワースの作品には、発話の再現法を変化させることによって、話している登場人物の感情の高まりや口調の変化を表現していると思われる例が見られる。オースティンの作品には、そのように解釈できる例もあるが、同様の手法でさらに面白い効果をあげている例も見られる。例えばオースティンの *Emma* には、話法の交代によって、その言葉を話している人物ではなく、その言葉を聞いている人物の感情の変化を表現していると思われる例が見られる。

最後に思考の再現法について考察する。オースティンは *Emma* や *Persuasion* において、主人公の心理描写に FIT を大いに活用している。この用い方は、それまでの作家とは一線を画しており、その後の作家に影響を与え、「意識の流れ」と呼ばれる技法につながっていったと思われる。リチャードソンの作品は書簡体形式を用いており、語り手はそれぞれの手紙の書き手であるので、いわゆる三人称の語り手のように他の人物の心の中を自由に覗き込んで表現することはできない。そのため FIT を活用することは困難である。フィールディングの *Tom Jones* はいわゆる三人称の語りで語られているが、登場人物の心理を内面から描いている部分は少なく、あっても IT か NRTA が用いられており、FIT は活用されていない。エッジワースの *Belinda* には FIT が見られるが、オースティンと違うのは、主人公以外の登場人物に対しても用いていることである。オースティンはほぼ主人公に限定して FIT を使用し、主人公の意識を中心に据えて物語を進めている。

海外学会等参加報告

第三回大谷大学・マールブルク大学学術交流シンポジウム参加報告

仏教・他宗教比較研究　研究員　村山　保史

2003年4月29日から5月4日まで、ドイツのマールブルク大学(Philipps-Universität Marburg)において、第三回大谷大学・マールブルク大学学術交流シンポジウム「世俗化の挑戦に直面する仏教とキリスト教」(Buddhismus und Christentum vor der Herausforderung der Säkularisierung)が開催された。

本シンポジウムは、その名称の示す通り、ドイツでも最古のプロテスタント系大学であるマールブルク大学の福音主義神学部(Fachbereich Evangelische Theologie)と国際仏教研究班との三度目の学術交流であり、1999年度(5月)にマールブルク大学において開催された第一回学術交流シンポジウム(第三回ルードルフ・オットー・シンポジウム)「仏教とキリスト教—浄土真宗と福音主義神学—」、そして2000年度に〔2000年10月にマールブルク大学からゲルハルト・マルセル・マルティン(Gerhard Marcel Martin)教授、マイケル・パイ(Michael Pye)教授、2001年3月には、ハンス=マルティン・バールト(Hans-Martin Barth)教授を招き〕大谷大学で開催された第二回学術交流シンポジウム「浄土真宗と福音主義神学の対話」に続く共同研究である。

シンポジウムへの大谷大学からの参加者は、国際仏教研究班チーフのロバート・F・ローズ教授、国際仏教研究(仏教・他宗教比較研究)班キャップの門脇健教授をはじめとして、嘱託研究員の寺川俊昭名誉教授、大河内了義神戸大学名誉教授、箕浦恵了名誉教授、研究員の宮下晴輝教授、A・デッケ=コルニル教授、木越康助教授、村山保史、研究補助員の岡本敦之(博士後期課程第三学年)、そして安冨信哉教授と吉田孝夫講師を加えた12名であった(当局を代表して、文学部長の延塚知道教授、大学院研究科長の池上哲司教授がマールブルク大学の視察を兼ねて参加された)。

大会は、4月29日、報道関係者も多数参加するなか、マールブルク大学神学部において、マールブルク大学のハンス=マルティン・バールト教授、マイケル・パイ教授によるシンポジウムの趣旨説明に引き続き、マールブルク大学神学部長ディートリヒ・コルシュ(Dietrich Korsch)教授の『教行信証』——SHINRAN, *Ken jōdo shinjitsu kyō-gyō-shō-monrui; Drei Vorworte*, Otani Universität, Kyoto, 2003〔本研究班による『教行信証』のいわゆる「三つの序」の独訳。翻訳と注解、そして寺川俊昭教授による「序文」(Einleitung)を含み、マールブルク大学の関係者に配布されるとともに、シンポジウム期間中は一般の聴講者にも配布された〕——の一節を引用した挨拶、そして本学文学部長の延塚知道教授と大河内了義教授の挨拶をもって開会し、二日目以降、それぞれの小テーマのもとに仏教とキリスト教が直面する世俗化の問題があらゆる角度から検討された。以下、二日目以降の大会のスケジュールを簡単に紹介して、シンポジウムの参加報告に代えたい(なお、大会を通じた主たる通訳は吉田孝夫講師と大河内了義教授であり、加えてマイケル・パイ教授、ロバート・F・ローズ教授、A・デッケ=コルニル教授がその任に当たった。講演等の原題はドイツ語ないし英語によるものであるが、読者の便宜を考えて原題と邦題——邦題のないものについては筆者による拙訳——の両方を示すことにする)。

大会二日目(4月30日)は、「東洋と西洋における『世俗化』概念の問題性」(Problematik des Begriffs "Säkularisierung" in Ost und West)という小テーマのもと、公開講演、講演、討論、ラウンドテーブルが行われた。

まず、9時からは宮下晴輝教授による講演「仏教の世俗の概念」(The Concept of the Secular in Buddhism)、それを受けるかたちで、マールブルク大学のヨッヘン=クリストフ・カイザー(Jochen-Christoph Kaiser)教授による講演「ドイツ/ヨーロッパにおける世俗化の根源」(Wurzeln der Säkularisierung in Deutschland/ Europa)がなされた。これに引き続き、11時からはマールブルク大学のアーデルハイト・ヘルマン=プファント(Adelheid Herrmann-Pfandt)教授を司会者とした、宮下晴輝教授とヨッヘン=クリストフ・カイザー教授による討論、さらに15時からはマイケル・パイ教授を司会者として、宮下晴輝教授、ヨッヘン=クリストフ・カイザー教授に大河内了義教授を加えたラウンドテーブルが行われた。

18時15分からは、マイケル・パイ教授を紹介者とした、

ハンス＝マルティン・バールト教授と箕浦恵了教授による公開講演会が、神学部大講堂に会場を移して行われた。マイケル・パイ教授は「諸宗教間対話の正当性、構造およびその実施について」(Zur Legitimation, Struktur und Durchführung von interreligiösem Dialog) で導入役を果たした。箕浦恵了教授の講演は「諸宗教の間の平和、諸宗教が相互に負っている責任、そして人類の未来にたいする責任」(Friede zwischen den Religionen. Die Verantwortung der Religionen für einander und für die Zukunft der Menschheit) であり、ハンス＝マルティン・バールト教授の講演は「諸宗教間の平和と諸宗教相互の責任」(Friede zwischen den Religionen. Die Verantwortung der Religionen für einander) であった。

大会三日目（5月1日）は、「東洋と西洋における『世俗化』の諸様相」(Erscheinungsbilder der Säkularisierung in Ost und West) という小テーマのもと、講演と討論が行われた。

まず、9時からマールブルク大学のヴォルフガング・ネートヘーフェル (Wolfgang Nethöfel) 教授による講演「西洋における宗教批判、脱ドグマ化そして脱宗派（教会）化」(Religionskritik, Entdogmatisierung und Entkonfessionalisierung im Westen) がハンス＝マルティン・バールト教授を司会として、11時からは木越康助教授の講演「真宗教学と近代化—浄土理解をめぐる論争から—」(Shin Buddhist Doctrinal Studies and Modernization —From Dispute over Understanding of Pure Land—) がマイケル・パイ教授を司会者として行われた。

15時からは「西洋と東洋における伝統の断絶と喪失」(Traditionsabbruch und Traditionsverlust in West und Ost) と題したラウンドテーブルが、ヴォルフガング・ネートヘーフェル教授と木越康助教授、そして大河内了義教授、ヨッヘン＝クリストフ・カイザー教授を加え、マイケル・パイ教授を司会者として行われた。17時からは、ベルリンにある「世界観問題に関する福音主義センター」(Evangelische Zentralstelle für Weltanschauungsfragen) 研究員のラインハルト・ヘンペルマン (Reinhard Hempelmann) 氏による講演「制度化された宗教から世俗的な宗教性への変容」(Transformation von institutionalisierter Religion zu säkularer Religiosität) が、マールブルク大学のゲルハルト・マルセル・マルティン教授を司会者として行われた。

大会四日目（5月2日）は、「解釈のコンセプト」(Interpretationskonzepte) という小テーマのもと、午前中には講演が、午後にはマールブルク大学の日本研究センター (Japan-Zentrum der Philipps-Universität Marburg) の訪問を行った。

午前中の講演は、9時からはゲルハルト・マルセル・マルティン教授の講演「終末論と神秘主義」(Apokalyptik und Mystik) がハンス＝マルティン・バールト教授を司会者として、11時からはロバート・F・ローズ教授の講演「末法：仏教の歴史観と鎌倉時代におけるその解釈」(*Mappō*: A Buddhist Theory of History and its Interpretations in Kamakura Japan) がマイケル・パイ教授を司会者として行われた。

大会五日目（5月3日）は、「仏教側とキリスト教側の反応」(Reaktionen auf buddhistischer und christlicher Seite) という小テーマのもと、講演が行われた。

まず、9時からは安冨信哉教授による講演「真宗と世俗主義—近代仏教への道—」(Shinshu and Secularism — The Way to Modern Buddhism—) がハンス＝マルティン・バールト教授を司会者として行われた。11時からは、仏教とキリスト教が直面するさまざまな危機と世俗化に関するグループディスカッションが二つの会場に分かれて行われた。

15時からは門脇健教授による講演「仏教的視点から見たキリスト教の反応」(Die Reaktionen auf christlicher Seite in buddhistischer Sicht) がヴォルフガング・ネートヘーフェル教授を司会者として、17時からはスイス・バーゼル大学のクラオス・オッテ (Klaus Otte) 氏の講演「キリスト教的な視点から見る仏教側の反応」(Die Reaktionen auf buddhistischer Seite in christlicher Sicht) がアーデルハイト・ヘルマン＝プファント教授を司会者として行われた。そして18時からは、門脇健教授、クラオス・オッテ氏らによるパネルディスカッションが行われた。引き続いて、これまでのディスカッションを総括するハンス＝マルティン・バールト教授と大河内了義教授の挨拶があった。

大会の最終日、六日目（5月4日）には、マールブルクから場所を移し、ルターゆかりの地、アイゼナハへの研修旅行が行われた。研修先は、ルターが15才から18才の三年間を過ごしたルター・ハオス (Luther Haus)。ザクセン選帝侯によってルターが匿われ、その一室 (Lutherstube) で新約聖書のドイツ語訳が完成されたヴァルトブルク (Wartburg)。ルター教会の音楽家、ヨハン・セバスティアン・バッハのバッハ・ハオス (Bach Haus)。ルターがヴォルムス国会の参会の際に宿泊し、またバッハが洗礼を受けた聖ゲオルク教会 (St. Georgkirche) であった。ゲオルク教会のファザードには——バッハのカンタータ第80番にも使われた、ルターの有名なコラールの一節——「我らが神は堅き砦」(EIN FESTE BURG IST UNSER GOTT) が、福音主義神学の信仰表現として刻み込まれていた。

第十一回国際真宗学会大会に参加して

国際真宗学研究　研究員　井上　尚実

2003年9月12日(金)から14日(日)の三日間、カリフォルニア州バークレーにおいて、第11回国際真宗学会大会が開催された。ハワイ・日本・北米の持ち回りで2年に一度開催されている大会であり、前回2001年の第10回大会は大谷大学で開催されている。今回は「現代世界における浄土の道」(The Pure Land Way in the Contemporary World)をテーマにバークレーの Institute of Buddhist Studies (IBS仏教大学院)が主催し、リチャード・ペイン教授、デービッド・マツモト教授、那須英勝教授を中心に、IBSの学生たちが大会の準備や運営を担当した。IBSが現在バークレー市内に独自の校舎を持たないため、会場にはカリフォルニア大学バークレー校キャンパスに隣接した Graduate Theological Union (GTU神学大学院連合)所属の Church Divinity School of the Pacific のホールが使用された。

今回は北米を中心に日本・ハワイ・ブラジル・オーストラリアなどから約90名の参加者があり、三日間で33の論文発表があった。英語圏における浄土真宗研究をリードする先生方、特に、今や「伝説的(legendary)」と紹介されるようになったハワイ大学名誉教授アルフレッド・ブルーム先生をはじめ、近年スミス大学を定年退職して真宗を英語で紹介する多くの著書を出版されているタイテツ・ウンノ教授、デューク大学を定年退職してカリフォルニアに居を移されたロジャー・コーレス教授、現役ではオバーリン大学のジャームズ・ドビンズ教授、武蔵野大学のケネス・タナカ教授などが、発表及びコメントで活発に参加され、どのパネルも盛況であった。本学からは真宗学科の安冨信哉教授と私が発表を行い、4回生1名、修士修了者1名が聴講者として参加した。またバークレー東本願寺からも得度されたメンバーの方など数名の聴講者があった。

学会の性格上、発表者には大学や研究機関に所属する研究者と、西本願寺系を中心とする寺院の住職や僧侶という大きく二つのグループがあり、その割合は今回約2対1であった。発表内容も、学術的なものから実践的なものまでかなり幅広くバラエティーに富んでいた。33の発表の一々について紹介することは出来ないが、文末に全発表者の氏名・所属と発表題目を含む大会プログラムを付記するのでそれを参考にしていただきたい。ここでは特に興味深い発表についてコメントしながら印象に残ったパネルの概要を報告することにする。

初日午前中、「浄土思想の現代的理解」(Contemporary Understanding of Pure Land Thought)のパネルでは、抽象的・哲学的概念や術語を用いることが、現代において真宗の教えを理解するのに役立っているのかどうかということが特に問題となった。「現代浄土教思想における不変のテーマ」という発表の中で、グレゴリー・ギブス師(オレゴン仏教会)は、デニス・ヒロタ編 *Toward Contemporary Understanding of Pure Land Buddhism: Creating a Shin Buddhist Theology in a Religiously Plural World* (2002) に収められた現代密教学やプロセス神学に影響された方法について、ある程度の有用性は認めつつも、そういったアプローチよりも真宗独自の行・宗教経験に焦点をあて、それを現代の明確な言葉で明らかにしていく方法に、より多くの可能性を認めている。ジョン・イオハラ師(ロサンジェルス、ヴェニス本願寺)は、「浄土の具象化:神話的真実と神話的実在」と題された発表で、自ら少数派だと認めつつ、近代教学における浄土の「非神話化」、合理的な説明の限界を指摘し、浄土経典が説く「神話」にはかけがえのない宗教的価値・力があるとして、抽象化・概念化された現代的「浄土」を「再神話化」(re-mythologize)する必要があるのではないかという問題を提起した。

タイテツ・ウンノ教授、ケネス・タナカ教授、ロジャー・コーレス教授が発表者として参加した今大会の特別パネル「二十一世紀の浄土真宗:その社会活動と伝道」では、今日のアメリカにおいて浄土真宗教団(BCA, Honpa Hongwanji Mission of Hawaii)が抱えている諸問題の分析と、それを乗り越えて発展していく方法について提言があった。従来指摘されてきた真宗用語の翻訳の問題(例えば「悪人」を evil parson と訳すとネイティブの人には抵抗があること等)は、優れた英訳書が揃い、英語中心で教えを伝えている現在のアメリカ仏教会では解消される方向にあるというのがパネルの共通認識であった。それよりも重大な問題は、アメリカの真宗が日系人の宗教としての「民族性」(ethnicity)の壁をどう乗り越え、どのように教えを社会に開いていくか(to open up the teaching=開教)ということであるという。タイテツ・ウンノ教授は、具体的な実践や経験の例をあげて、「親鸞の教えの庭を北アメリカに開墾し耕していく」

(cultivation of Shinran's gardens in North America) 道を示唆された。ケネス・タナカ教授は、真宗を広める上で人種 (race) としての「民族性」は大きな障碍であるが、文化 (culture) として「民族性」は役に立つ財産であると論じた。会場からも様々な意見やコメントがあり、アメリカの浄土真宗教団が、「変わるか滅びるか」(change or perish) という危機感をもって時代・社会に向き合っている真剣さが伝わってきた。同様の雰囲気は、三日目午前中の「グローバル化する真宗と社会への働きかけ」と題されたパネルからも感じられた。

教学的な面の発表では、二日目午後の「近代社会における真宗教学の発展」(Development of Shin Buddhist Thought in Modern Society) というパネルにおいて、アルフレッド・ブルーム教授が清沢満之の人と思想について、安冨教授が「真宗の公共思想」について、また本学に留学して修士を終えたパティ・ホンダ・ナカイ、ウェイン・ヨコヤマの両氏がそれぞれ発表を行ない、大谷大学関係のパネルといった感があり印象に残った。また「江戸宗学の再評価」(Reappreciation of Shin Buddhism in the Tokugawa Period) と題された龍谷大学の島津恵正氏の発表は、英語圏ではまだあまり紹介されていない分野であり、会場の反響が大きかった。

新たな実践的分野の発表としては、第4パネルの「真宗と仏教カウンセリング」や、GTU のスコット・ミッチェル氏による「ヴァーチャル道場としての Shin Dharma Net」という発表が興味深いものであった。特に後者は、ハワイのブルーム先生が主催しているウェブ・サイト (www.shindharmanet.com) の活動についてのレポートで、インターネットを利用して真宗の教えを広めていく可能性を積極的に評価しつつ、その限界や問題点も指摘していて参考になった。

三日間の日程に盛り沢山の発表があり、時差ボケのあるなかですべてを聴講することは気力・体力を消耗したが、各国から集まった真宗の研究者や僧侶の発表を集中的に聴くことができて有意義な学会参加であった。なお、次回第12回大会は2005年に武蔵野大学で、その次の2007年はカナダのカルガリー大学で開催される予定である。

第11回国際真宗学会大会プログラム

9月12日(金)午前

9：00～10：00

受付・登録

10：00～12：00

第1パネル　「浄土思想の現代的理解」

(Contemporary Understanding of Pure Land Thought)

司会：デービッド・マツモト (IBS)

1．アンジェラ・アンドラーデ (Angela Andrade) (南米支部)

「他力の道における限界と超越について」

(A View on Limits and Transcendency within the Other Power Way)

2．グレゴリー・ギブス (Gregory Gibbs) オレゴン仏教会

「現代浄土教思想における不変のテーマ」

(Enduring Themes in Contemporary Pure Land Thought)

3．石田法雄　滋賀県立大学

「浄土は現代世界のどこにあるのか」

(Where can Pure Land be in the Contemporary World?)

4．ジョン・イオハラ (John Iwohara) ロサンジェルス、ヴェニス本願寺

「浄土の具象化：神話的真実と神話的実在」

(Reification of the Pure Land: Mythological Truth and Mythological Reality)

5．野村伸夫　京都女子大学

「親鸞にとっての言葉と文字」

(Words and Characters Shinran)

6．佐藤　平　ロンドン三輪精舎　Three Wheels Temple

「浅原才市と空の体験」

(Asahara Saichi and His Experience of Emptiness)

14：00～17：00

第2パネル　特別発表「二十一世紀の浄土真宗：その社会活動と伝道」

(Lay Outreach and Propagation in 21st Century Jodo Shinshu)

司会：ゴードン・バーマント

1．ゴードン・バーマント (Gordon, Bermant) ヴァージニア恵光寺

「アメリカ仏教会 (BCA) 社会活動プログラムの紹介」

(An Introduction to the BCA Outreach Program)

2．タイテツ・ウンノ (Taitetsu Unno) スミス大学

「英語における Evil Person (悪人)：日本語からの翻訳における諸問題」

(The Evil Person in English: Issues in Translation from Japanese)

3．ケネス・タナカ (Kenneth Tanaka) 武蔵野大学

「アメリカの真宗寺院における民族性の役割：開教への碍げなのか強みなのか」

(The Role of Ethnicity in American Shin Temples: An Obstacle or an Asset in Propagation?)

4．ロジャー・コーレス（Roger Corless）デューク大学
「創価学会がアメリカで成功したのは何故か」
(What Accounts for the Success of Soka Gakkai?)

5．ゴードン・バーマント（Gordon, Bermant）ヴァージニア恵光寺
「アメリカ浄土真宗の発展：キリスト教伝道のモデルから学べること」
(Growing Jodo Shinshu in America: Are There Lessons from the Chistian Mission Model?)

18：30～21：00（晩餐会中）
基調講演
徳永道雄（京都女子大学）
「正義・倫理規範と浄土真宗」
(Justice, Ethical Norms, and Shin Buddhism)

9月13日(土)午前
9：00～10：45
第3パネル　司会：石田法雄（滋賀県立大学）

1．飛鳥寛静　富山県善興寺
「六師外道と親鸞」
(Six Heretics and Shinran)

2．井上尚実　大谷大学，EBS
「煩悩と本願：親鸞の六角堂夢告と釈尊の降魔成道」
(Passion and the Vow: Shinran's Dream-samādhi at Rokkakudō and Gautama's Temptation by Māra)

3．島津恵正　龍谷大学 社会科学研究所
「江戸宗学の再評価」
(Reappreciation of Shin Buddhism in the Tokugawa Period)

4．スコット・ミッチェル（Scott Mitchell）Graduate Theological Union
「ヴァーチャル道場としての Shin Dharma Net」
(Shin Dharma Net as Virtual Dojo)

11：00～12：45
第4パネル「真宗と仏教カウンセリング」
(Shin Buddhism and Pastoral Counceling)
司会：リチャード・ペイン（IBS）

1．スーザン・アボット（Susan M. Abbott）ミルス・ペニンシュラ病院
「病院所属カウンセラー僧の倫理」
(Towards an Ethic of Buddhist Pastoral Presence)

2．メアリー・デービッド（Mary L. David）IBS
「阿闍世の深い悲しみ：グリーフ・カウンセリングへの真宗的アプローチ」
(Ajatasatru's Grief: Developing a Shin Buddhist Approach to Grief Counseling)

3．ジョアン・ミード（Joanne B. Mied）北米支部
「傷病者のための仏教カウンセリング：真宗的アプローチ」
(Pastoral Counseling of the Sick and Injured: Shin Buddhist Approaches)

4．リチャード・ペイン（Richard K. Payne）IBS
「砂と砂利：カウンセリング法を求めて仏教の伝統を発掘する」
(Sand and Gravel: Mining the Buddhist Tradition for Miniserial Counseling)

14：00～15：45
第5パネル「近代社会における真宗教学の発展」
(Development of Shin Buddhist Thought in Modern Society)
司会：ジェームズ・ドビンズ（オバーリン大学）

1．アルフレッド・ブルーム（Alfred Bloom）ハワイ大学名誉教授
「清沢満之と仏教再興の道」
(Kiyozawa Manshi and the Path to Revitalization of Buddhism)

2．パティー・ホンダ・ナカイ（Patti Honda Nakai）シカゴ仏教会
「悪の了解：毎田周一の著作を通して歎異抄を理解する」
(Access of Evil: Understanding the Tannisho though the Writings of Shuichi Maida)

3．安冨信哉　大谷大学
「浄土真宗の公共思想」
(The Idea of 'Publicness' in Jodo Shinshu)

4．ウェイン・ヨコヤマ（Wayne S. Yokoyama）花園大学
「鈴木大拙と米国西本願寺の関わり：その初まりの頃」
(D. T. Suzuki's Involvement with the Nishi Hongwanji in the United States: Early Years)

16：00～17：45
第6パネル　司会：野村伸夫（京都女子大学）

1．市村承秉　北米禅仏教学研究所（North American

Institute of Zen and Buddhist Studies)
(Amida's Vow and Mahayana Insight sunyata)

2．アグネス・アンジェスカ（Agnes Jedrzejewska）ポーランド浄土真宗サンガ
「仏陀の女弟子：現代社会のための親鸞の教え」
(The Female Disciples of Buddha: An Understanding of Shinran's Teachings for Our Present Times)

3．フダヤ・カンダジャヤ（Hudaya Kandahjaya）Graduate Theological Union.
「ボロブドゥールのジャワ人たちは弥陀浄土を知っていたか」
(Did Javanese of Borobudur know Sukhavati?)

4．ケネス・タナカ（Kenneth Tanaka）武蔵野大学
「元暁の大無量寿経注釈：新羅から日本浄土教への影響」
(Won-hyo's Commentary on the Larger Sukhavativyuha Sutra: Implications for Korean Influence on Japanese Pure Land Buddhism)

9月14日(日)午前
9：00～11：00
第7パネル　グローバル化する真宗と社会への働きかけ
(Globalization Shin Buddhism and the Dynamics of Outreach)
司会：ケネス・タナカ（武蔵野大学）

1．ドリーン・ハミルトン（Doreen Hamilton）トロント仏教会開教使補
「精神の健康：親鸞の'信心の人'とエイブラハム・マスローの'自己実現の人'の比較」
(Spiritual Health: A Comparison of Shinran's 'Person of Shinjin' with Abraham Maslow's 'Self-actualizing' Person)

2．ジョン・パラスケヴォポラス（John Paraskevopoulos）オセアニア・東アジア支部
「現代世界における阿弥陀仏の教え」
(Amida's Dharma in the Modern World)

3．グスタヴォ・ピント（Gustavo Pinto）南米支部
「ルーツに戻る：西欧における浄土真宗」
(Back to the Roots: Jodo Shinshu in the West)

4．ラヴァーン・ササキ（LaVerne Sasaki）BCA名誉住職
「異人種・異宗教間の結婚とその儀式」
(Inter-racial and Inter-faith Marriage and Ceremony)

5．ゲルハルト・シェパーズ（Gerhard Schepers）国際キリスト教大学
「グローバル化というコンテクストにおける親鸞の教え」
(Shinran's Way in the Context of Globalization)

客員研究員報告

『菩提道次第広論』の中国語訳について

中国蔵学研究中心研究員　ダム ドゥル

日本仏教伝道協会の援助のもと、日本の文化の中心都市・京都にある大谷大学で3ヶ月間研究活動を行うという素晴らしい機会を得た。以下、簡単にその報告をおこなう。

1　本研究の背景

今回の日本滞在中の研究の目的は、『菩提道次第広論』のいくつかの部分について、現代の外国の研究者たちによる研究成果を参照にしながら、中国語による訳註を作成することである。

『菩提道次第広論（*Byang chub lam rim chen mo*）』は、チベット仏教ゲルク派の開祖ツォンカパ・ロサンタクパ(Tsong kha pa Blo bzang grags pa, 1357-1419）の著作である。アティーシャ（Atīśa, 982-1054）の『菩提道灯論（*Byang chub lam sgron*）』と、トルンパ・ロドージュンネー（Gro lung pa Blo gros' byung gnas, ca. 12c）の『テンリム・チェンモ（*bsTan rim chen mo*）』などを根本に据え、多くの経・論を根拠として引用して、仏教の教理を1つにまとめていながら、何の矛盾もなく理解できる特に優れた教誡と、凡夫・初学者から遍智（仏）の地位に至るまでの下品、中品、上品という3種の人たちの悟りに至る階梯を子細に示した論書である。

この論書は著作されて以降、チベットの宗派を越えた仏教者たちに重視され、注釈も数多く著わされた。中国においては、まず中国人の僧・法尊によって中国語訳され、そこから続く聞思の伝統が広まり、これを説く学者も多く現れた。それゆえ、中国大陸をはじめとして、台湾、香港、シンガポールなど中国仏教が盛んなほとんどの地域において、この論書の多大な影響を見ることができるのである。

この論書に対する、近代的な研究についていえば、チベット、中国などの歴代学者たちが数多くの研究を行っており、成果も数多く発表されている。さらに外国の学者たちもこの論書に対して興味を持ち、子細な研究を盛んに行ってきた。総じて西洋諸国のチベット学に関わる研究機関の中に、この論書の研究を専門に行う機関や学者がおり、英訳もある（The Lamrim Chenmo Translation Committee (tr.), *The great treatise on the stages of the path to enlightenment*, vol. 1, Snow Lion Publications, Ithaca, N.Y., 2000.）。特に日本では、学者たちが、その一部に対する訳註を発表している（長尾雅人『西蔵仏教研究』岩波書店、1954年．ツルティム・ケサン、小谷信千代『仏教瑜伽行思想の研究』文栄堂書店、1991年．）ばかりか、この論書に対する子細な科文を作成してきた（東洋文庫チベット研究室『西蔵仏教基本文献』第1巻、東洋文庫、1996年．）。特に現代の代表的なチベット人学者ツルティム・ケサン大谷大学教授は、この論書に引用されている経論の所在を丹念に捜索し、これまでにない素晴らしい成果を発表している（『尊者ツォンカパの「菩提道次第大論」』；*rJe Tsong kha pa'i lam rim chen mo'i lung khung gsal byed nyi ma*, 日蔵仏教文化叢書＝Nin bod nan rig deb grans 6, Tibetan Buddhist Culture Association, Kyoto, 2001）。

2　今回の研究の主な内容とその必要性

深遠な内容を理路整然と説いたツォンカパの著作『菩提道次第広論』の全てを、現代の研究成果を盛り込みながら新たに中国語に翻訳することは、極めて重要なことであるが、大変な困難を伴う。浅学菲才の私にとって、並み大抵の努力ではなし得ないことであるが、幸いにもツルティム・ケサン教授の教示のおかげでこの数カ月の間に、『菩提道次第広論』のうち上品の章の発菩提心と、発心から入行法についてまでを現代一般に使われている中国語に翻訳することができた。今回翻訳終了した部分は修正や増補をおこない、中国蔵学研究中心発行の雑誌『中国蔵学』に発表する予定である。

この論書を中国語に翻訳する必要性について述べよう。先述のとおりこの論書は、法尊によって全巻既に中国語に翻訳されている。ではなぜそれを今回新たに翻訳すべきなのか。その理由は以下の2点である。

(1)法尊が翻訳をおこなったのは、1933-34年であり、約70年を経ている。その間中国語も変化し、また、様々な時代的状況のもとで、この論書に対する講義と研究の伝承が途絶えている。それゆえ、現代の人々がこれ

を授受し聞思し研究する際、たいへんな困難に直面するのである。法尊の中国語訳は、仏教の基礎的な理解のない者には理解困難なものであり、基礎的な理解が少しある者にとっても、チベット語の原本と対照しながら読まなければ、場合によってはまったく逆の理解をしてしまうことさえあるような訳となっている。それゆえ、現代中国語訳が必要なのである。

(2)チベット・中国において、この論書についての注釈は数多くあるが、現代の国際的な方向性に沿った研究の成果は非常に少ない。そこで、ツルティム・ケサン大谷大学教授が、現代の学者たちの研究成果と自身の知識を基にして、既に述べたような成果を発表している。これは、今まで発表された『菩提道次第広論』に引用される経論についての注釈の中で、もっとも子細なものである。私が訳註を施した部分だけ見ても、氏の研究の中では70もの典拠が明らかにされている。このような研究を中国語で紹介すれば、中国のチベット仏教研究者に大きな刺激となるだろう。

以上が今回『菩提道次第広論』の一部を、新たに中国語訳し註を付す理由である。

3　謝辞

私にこのような素晴らしい機会を与えてくださった日本仏教伝道協会に心より感謝をしたい。

同協会の奨学金を得た後、大谷大学からは、私を客員研究員として受け入れてくださるとの承諾をいただいた。御尽力下さった関係各位に心よりお礼を申し上げたい。

研究の面では、ツルティム・ケサン教授にお忙しい中『菩提道次第広論』の講読指導を何度もしていただき、また、これまで数年間の私の研究成果についても、忌憚のない意見を頂戴し、あらゆる面での指導をくださった。教授に対してはこの上ない感謝の念を捧げたい。

また、今回、多くの学者とお会いし、研究について話しをする機会を得た。一方で私には、中国のチベット研究の状況を報告する機会を与えてくださった（西蔵語文献研究会主催研究会「中国におけるチベット学の現状について（Krung go'i bod rig pa'i zhib' jug tshan pa'i gnas tshul）」2003年２月12日）。

今回、日本仏教伝道協会の援助と大谷大学の招待により、日本での研究活動の機会を与えられたことにより、新たな見聞と、これまでにないほどの成果を得ることができた。関係各所と関係者に感謝したい。帰国してからも、今回の経験と研究成果をいかし、努力してゆく所存である。

真宗総合研究所彙報　2003.4.1～2003.9.30

■研究所関係

◎真宗総合研究所委員会

◇7月28日(月)　17時（響流館4階会議室）

1．研究所規定の改定について

2．その他

○指定研究キャップ連絡会

◇5月22日(木)　12時10分～50分（博綜館5階　第4会議室）

1．2003年度の「指定研究」研究体制について

2．その他

○指定研究庶務連絡会

◇5月26日(月)　17時10分～

（真総研ミーティングルーム）

1．2003年度の「指定研究」研究事務について

2．その他

■指定研究研究会

清沢満之研究

《会議》

◇6月4日(水)　16時～17時30分

『清沢満之全集』編集委員会

全集の刊行状況について

刊行後の課題について

その他

◇8月1日(金)　16時～17時30分

編集会議（岩波書店を交えて）

全集の刊行を終えて

刊行後の課題について

その他

尚、上記のほか、各巻の編集校正のための会議は、各巻編集担当者と研究員および研究補助員で、およそ2日に1度の割合で行った。一々の詳細については省略する。

《資料調査》

◇4月2日(水)～3日(木)（同朋大学図書館、愛知県立図書館、碧南市光輪寺ほか）

自筆原稿の撮影、石碑の調査ほか

◇5月9日(金)（名古屋市祐誓寺）

住田智見自筆ノートの確認および借用

◇9月11日(木)～12日(金)（岐阜県上宮寺）

近代仏教関係の文献調査

《研究会》

◇9月16日(火)～17日(水)（湖西キャンパス）

全集刊行後の課題確認ほか

真宗学事史研究

《『大谷大学百年史資料編付録―「学徒出陣」・「勤労動員」体験資料集』の編集・発行に関する業務》

〈編集会議〉

◇4月3日(木)　16：00～19：00

（真総研学事史研究研究スペース）

◇4月25日(金)　19：30～21：00　（同　上）

◇7月25日(金)　17：00～20：00　（同　上）

◇9月22日(月)　15：00～20：30　（同　上）

〈編集と読み合わせ、問題点の検討〉

◇4月8日(火)　17：00～20：00

（真総研学事史研究研究スペース）

◇4月10日(金)　18：00～21：00　（同　上）

◇4月17日(木)　19：30～21：00　（同　上）

◇5月8日(木)　19：30～22：00　（同　上）

◇5月9日(金)　19：30～22：00　（同　上）

◇5月12日(月)　17：00～20：00　（同　上）

◇5月16日(金)　16：00～21：00　（同　上）

◇5月23日(金)　15：00～20：00　（同　上）

◇5月29日(木)　19：30～21：00　（同　上）

◇6月2日(月)　17：00～20：00　（同　上）

◇6月13日(金)　16：00～20：00　（同　上）

◇6月20日(金)　16：00～20：00　（同　上）

◇7月4日(金)　16：00～20：00　（同　上）

◇7月10日(木)　18：00～21：00　（同　上）

◇7月17日(木)　18：00～21：00　（同　上）

《他大学における大学史史料室・

大学史研究の現状に関する調査（第1回）》

◇7月7日(月)

（参加者　安冨信哉〈真宗学事史研究　キャップ〉、織田顕祐〈真宗総合研究所　主事〉、東舘紹見〈真宗学事史研究　研究員〉）

9：30～11：30

（東京大学史史料室〈東京都文京区本郷7―3―1

東京大学本郷キャンパス安田講堂内〉）

12：30～14：30

（早稲田大学大学史資料センター〈東京都新宿区西早稲田1―6―1

早稲田大学西早稲田キャンパス2号館内〉）

15：30～17：30

（國學院大學百周年記念室〈東京都渋谷区東4丁目10―28　國學院大學渋谷キャンパス百周年記念館内〉）

各大学において、大学史研究と史料室の歩みと現状、課題について担当者よりお話しを伺い、関連諸施設を見学

した。

国際真宗学研究　仏教・他宗教比較研究

《研究会》

◇4月9日(水)　13時30分（真総研ミーティングルーム）
大谷大学・マールブルク大学学術交流に向けての打ち合わせ

◇5月28日(水)　18時（真総研ミーティングルーム）
・大谷大学・マールブルク大学学術交流の反省会
・今年度の研究方針の確認

◇6月25日(水)　18時（真総研ミーティングルーム）
・『仏教とキリスト教の対話Ⅱ』編集作業
・『仏教とキリスト教の対話Ⅲ』出版に向けての打ち合わせ

◇9月17日(水)　14時（真総研ミーティングルーム）
・『仏教とキリスト教の対話Ⅱ』および『仏教とキリスト教の対話Ⅲ』編集作業

《第三回大谷大学・マールブルク大学学術交流シンポジウム》

◇4月29日(火)～5月4日(日)（ドイツ・マールブルク大学）
（詳細は、別頁の「参加報告」を参照）

西蔵語文献研究

《研究会》

◇毎週水曜日　13時
1）北京版カンギュル所載各テキストの奥書きのデータベース化
2）『インド・チベット仏教史』（蔵外11847）の校訂

◇チベット語文献輪読会
毎週火曜日　17時～　『セ・ドゥラ』
担当：福田洋一
毎週木曜日　18時30分～　『カダム陽光史』
担当：三宅伸一郎

◇7月10日　16時10分（響流館4階応接室）
研究所を訪問された青海民族学院教授・東京外国語大学AA研客員教授・ドゥモヒチ氏を囲み、青海民族学院でのチベット研究の現状についてお話を伺った。

◇7月29日　16時10分（真総研ミーティングルーム）
今年度前期の活動状況報告と今後の活動の打ち合わせ

パーリ語文献研究

《研究会》

◇4月24日(木)　午後4時より（マルチメディア演習室）
清水洋平（研究補助員）
「ワット・ポー寺院所蔵貝葉写本の紹介」
本年度の研究計画について

◇5月23日(金)　午後4時より
（名古屋ガーデンパレス会議室）
前田惠學（愛知学院大学名誉教授）
「東南アジアにおける上座仏教の現状」

◇6月12日(木)　午後4時より
（真総研ミーティングルーム）
前回研究会及びパーリ学仏教文化学会の報告
本研究会における大谷貝葉写本の研究方針の確定

◇7月24日(木)　午後4時より（響流館4階会議室）
羽塚高照（本学博士後期課程）
「阿含経典の発達過程と Milindapañha の成立について―特に信等の五根の発達を中心として―」

◇9月27日(土)　午前10時30分より
（真総研ミーティングルーム）
村西弘行（本学博士後期課程）
「Cāgadāna-jātaka ―大谷版とビルマ版の詩偈の比較―」
田辺和子（嘱託研究員）
「フランス極東学院とビブリオテークナショナルの Paññāsajātaka」

漢訳文献研究

《研究会》

◇4月18日(金)　16時10分（真総研ミーティングルーム）
・今年度の研究計画についての打ち合わせ
・大蔵経学術用語研究会理事会（3月28日(金)・於立正大学）の報告（報告者、キャップ木村宣彰）

◇5月7日(水)　17時（真総研ミーティングルーム）
・研究課題についての検討
・貞慶『法華開示鈔』の解読研究

◇5月23日(金)　16時30分（真総研ミーティングルーム）
『法華開示鈔』の解読研究

◇6月4日(水)　16時30分（真総研ミーティングルーム）
『法華開示鈔』の解読研究

◇6月20日(金)　16時30分（真総研ミーティングルーム）
『法華開示鈔』の解読研究

◇6月30日(月)　16時10分（図書館貴重書閲覧室）
貞慶の著述（図書館所蔵貴重書）の閲覧・調査

《大蔵経学術用語研究会理事会》
（出席者、キャップ木村宣彰）

◇7月4日(金)　13時30分
（龍谷大学大宮学舎　清和館3階会議室）
議題：仏教系六大学の大蔵経学術用語研究会の将来について

大谷大学DB研究

《研究会》

◇7月4日(金) 17：50～20：00

(マルチメディア演習室)

前田千尋

「北京版チベット大蔵経の撮影からスキャニングによるデジタル化に至るまで―現場からの作業報告―」

松川　節

「北京版チベット大蔵経のデジタル化と人文科学における貢献」

《連絡会議》

◇4月17日(木) 11：00～13：00

(真総研ミーティングルーム)

・2003年度活動内容について

・貴重書写真撮影の現況報告（前田・有松・箕浦）

◇5月22日(木) 11：00～13：00

(真総研ミーティングルーム)

・大谷大学所蔵蠟管調査について

・貴重書写真撮影について

◇6月20日(金) 17：50～19：20

(真総研ミーティングルーム)

・貴重図書撮影作業の現況と今後の作業日程について

・蠟管及び蠟管蓄音機修復作業の今後について

・作業室移転について

・アルバイトの補充について

◇7月9日(水) 17：50～19：20

(真総研ミーティングルーム)

・第1四半期予算執行状況

・貴重図書撮影作業の現況

・スキャニング作業の現況

・蠟管及び蠟管蓄音機修復作業の現況

・響流館4階貴重書写真撮影室の整備について

・新規アルバイトのリクルートについて

◇8月7日(木) 16：10～17：40

(真総研ミーティングルーム)

・大谷大学所蔵蠟管の調査・復元状況について（㈱シェルマン・磯貝建文氏）

・スキャニング作業の現況

・響流館4階貴重書写真撮影室の整備について

・新規アルバイトのリクルートについて

◇9月18日(木) 16：10～17：40

(真総研ミーティングルーム)

・第2四半期予算執行状況

・大谷大学所蔵蠟管及び蓄音機のメンテナンス発注状況

・新規アルバイト2名の研修結果について

・蠟管及び蠟管蓄音機修復作業の今後（大型ホーン用クレーンの導入について）

研　究　所　報　第 43 号

2003年10月 1 日　発行
編集発行　大谷大学真宗総合研究所
〒603-8143　京都市北区小山上総町
Tel. 075-411-8498　Fax. 075-411-8435